

裏・幻想紅魔郷

悪魔と天使

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想紅魔郷この話の知られざる話（二次創作）

レミリアとフランには姉がいた。

しかしある事をきっかけに紅魔郷では話されなかった。

本当の真実…

そして次々にくる謎の訪問者。

時空が歪み話が変わる。

その話が今始まるうとしている…

目次

本編

第1話 紅き吸血鬼 ヤンデレ・スカー

レット | 1

第2話 紅き墮天使と白き狐 | 4

第3話 初めての仕事・黒き狐

10

第4話 キノコ採りと不思議なマジ

シャン | 19

第5話 コーリンの手伝い | 29

第6話 墮天使と狐と旅人と…

36

番外編

第6.5話 (番外編) みんなで温泉

旅行 (前編) | 45

第6.5話 (番外編) みんなで温泉旅

行 (中編) | 62

第6.5話 みんなで温泉旅行 (後編)

| 75

本編

第7話 紅魔館とヤンデレの記憶

97

第8話 レミアア恋!? 月夜との再開

109

第9話 スーパー? 電腦姉妹!

120

第10話 魔理沙への思い
—

本編

第1話紅き吸血鬼 ヤンデレ・スカーレット

第1話紅き吸血鬼 ヤンデレ・スカーレット

ヤン「はあー！もう絶対に許さないわ！レミリア！フラン！（怒）。もう紅魔館に戻らないわ！」

私の名前は、ヤンデレ・スカーレット。紅魔館の当主でありレミリアとフランの姉。何故、私が怒っているかと言うと…

時間は、少し前に遡る…

私は紅魔館の地下の牢屋に閉じ込められていたの。私の力や能力などが強すぎてね。そしてフランが閉じ込められたのを聞いて私はレミリアに言ったわ。「フランを何故閉じ込めたの？」ってね。そしたら「あの子の力は強すぎる。あなたよりは、弱いけど」ってレミリアは、言った。私は、そこで少し考えたの。フランを閉じ込めないで今までどうり過ごさせるために。だから私はレミリアに「紅魔館会議」をしたいといいました。そしたらレミリアは、「いいわよ」と言ってくれ私もフランも一度牢屋から出してもらったの。そして会議をした。内容は、今後どうゆうふうにならねえか？とどうしたら

過ごせるかを考えたかった。レミリアの意見にフランが賛成すればフランは、牢屋にいらなくてすむ。私だけが地下の牢屋で1人出ればいいと思った。しかしレミリアの意見は最悪と言つていいほど嫌なものだった。

幻想郷を支配する

私は、レミリアに聞いた。

ヤンデレ「なんで？みんな仲良く暮らすのにこの幻想郷を支配する必要ある？」

レミリア「みんな仲良くするなら幻想郷を支配して思い通りにすればいいのよ。」

私は、レミリアの頬叩いた。

ヤンデレ「あなたは、何を考えているの…。幻想郷は、支配するものじゃない…。」

レミリア「ツ…！お姉様なんか…いなくなっちゃえばいいんだ！」

ヤンデレ「…：分かったわ。私は、この屋敷を出ていく。みんな今までありがとう。」

じゃあね。紅魔館は、レミリアにあげるわ。」

そして私は、屋敷から出て今に至る。

ヤンデレ「はあ…：疲れた少し休憩しましょう。」

さっきのことが頭を過ぎる。

私は、魔法の森の木の上で胸を少し痛めた。

少し下を見ると家が見えた変わった形をしており誰かが入って行くのが見えた。

ヤンデレ「あれは魔理沙ね。この森に住んでいたのね。」

ヤンデレ「今回は、魔理沙の家に泊めてもらおうかしら？」

そう考えた私は、魔理沙の家に降りた。

コンコン（ドアを叩く音）

魔理沙「誰だぜ？」

ヤンデレ「こんにちは魔理沙。」

魔理沙「ヤンデレか！久しぶりだぜ！」

ヤンデレ「ええそうね。」

魔理沙「どうしたそんな浮かない顔して。まあとりあえず家の中に入ってくれ」

ヤンデレ「お邪魔します。」

第2話紅き墮天使と白き狐

第2話 紅き墮天使と白き狐

魔理沙「で、どうしたんだ？」

魔理沙は、不思議そうに私に聞いてきた

ヤンデレ「実は…」

く少女お話中く

ヤンデレ「てことになってしまったの…。」

魔理沙「いつもの事だろ？またあやまればいいじゃんか。」

ヤンデレ「嫌よ！大体レミリアが悪いのよ。幻想郷を支配するなんて言うから。」

魔理沙「ちよつとまで。今、幻想郷を支配するって言ったよな？」

ヤンデレ「ええ。言ったわよ。」

魔理沙「それつてもしかすると…」

ヤンデレ「いずれまたこの幻想郷が…」

魔理沙・ヤンデレ「紅く染まる！」

魔理沙「まあ、まだ決まった訳じゃない。この話は、2人の秘密な？」

ヤンデレ「分かったわ。」

そして夜を迎えた。

リーリー（鈴虫の音）

ヤンデレ「魔理沙ありがとう。私が一人で頑張るから。」

バサッ

私は森の上で姿を変えた：

男になった。俺の名前はブラック。墮天使だ。

次の日

ブラック「美味しい！この木の実なんていうんだらう？」

ルーミア「そーなのかー。」

ブラック「はあ？」

ルーミア「久しぶりなのかー。ヤンデレなのかー。」

ブラック「え！ルーミア何故分かった？」

ルーミア「昨日見てたのさー。」

ブラック「マジかよ。」

ルーミア「でも内緒にするよ。」

ブラック「なんでだ？」

ルーミア「かつこいいから♥」

タツタツタツ（走っていく音）

ルーミアは、そう言うとは何処かへ言ってしまった。

ブラック「かつこいい……。なんか嬉しい気持ちだ。」

次元のゆがみがおきた

ブラック「なんだこれは！」

魔理沙「おーいどうした？」

すると向こうに魔理沙がいた。

ブラック「魔理沙！あれどうして？」

魔理沙「何も言わずに出ていくなよな。困るだろ。」

ブラック「……。お前、魔理沙じゃないな。」

俺は、すぐに距離をとった。

???「この私の変装を見破るとはなかなかだな。」

そうするとそいつの体は魔理沙から少女のような姿になった。

ブラック「誰だ？」

赤ずきん「私はブラッド赤ずきん……。よろしくね。」

そうゆうといきなり襲い掛かって来た。

ブラック「危ねえ！何すんだよ！」

俺は、とつさに飛んで置いて正解だと思った。

赤ずきん「あなたの血が欲しいの頂戴♪」

ブラック「仕方ねえ…。幻想「アンダーワールド」

俺は、スペルカードを発動した。

赤ずきん「なくに今のは？」

無傷だった。

ブラック「なんでだ…。あつ。うわあああ！」

俺は飛んでいたら木に体を強くぶつけ落ちてしまった。

赤ずきん「もう終わりかく。じゃあいただけさまー…」

ブラック「やばい…！」

ガキン！

その時刃物が強くぶつかつたような音が鳴つた。

???「大丈夫か？」

ブラック「あなたは？」

大神「俺は、電龍　大神！」

ブラック（この人もしかして…あの時の？）

大神「おっとそんな場合じゃなさそうだね。あれはなにもの？」

ブラック「ブラッド赤ずきんって言うやつ。血を求める狂者だろう。そしてスペルカードがきかないそうさ。直接の攻撃はきくそうだが？」

大神「よく知ってるね？まあここは俺に任せて！」

ブラック「わかった。」

俺は、大神に死なないようにと小さく呟いた。

大神「今の声どこかで？」

赤ずきん「あなたがくれるの？」

大神「残念だがあなたには死を償ってもらおう。」

そう言つて大神は、刀を上から下へと切つた。

赤ずきん「うっ！なに…何がおこつたの？」

そう言つると赤ずきんは、消えてしまった

大神「ふう…一件落着」

ブラック（あいつは…電龍 大神…。1度戦つた相手だな。）

大神「そこにいるのは分かつてる。降りてきてくれないか？」

ブラック「よく分かつたな。」

大神「まあね。君、名前は？」

ブラック「ヤン…ブラックだ。」

大神「ブラックね。よろしく。改めて電龍　大神だ。」

ブラック「大神か…。よろしく。」

大神「あのさ…さつきから気になってたんだけど。なんでそんなに怖がってるの？」

ブラック「俺は、巫女無理なんだよ。（ガタガタガタ）」

第3話 初めての仕事・黒き狐

第2話 初めての仕事・黒き狐

大神「大丈夫。俺は、巫女じゃない。ただの狐さ。」

ブラツク「えっそうなのか？」

大神「うん。見た目がそう見えるだけだよ。」

ブラツク「そうか。なんかすまないな。」

大神「いや大丈夫だから。ああそう言えばこの近くでヤンデレ・スカーレットって言う吸血鬼知らない？」

ブラツク「えーつと知らないな…(汗)」

ヤバい正体がバレたら…

大神「そうか。あのさ。君の種族と能力教えてくれない？」

ブラツク「なんでですか？」

大神「いやあのさ。一応友達だからさ。」

ブラツク「わかった。俺はブラツク、墮天使だ。能力は、無限コンテニューだ。」

大神「コンテニューってもしかして生き返れるの？」

ブラック「一応な。」

ブラック「あのさ。なんかいい仕事ない？」

大神「なんでいきなりそんなことを聞くの？」

ブラック「暇だからな。」

大神「ん〜。あ！文の新聞配達は？募集してたよ。」

ブラック「あいつ幻想郷最速の天狗なのになんで募集してるのかな？」

大神「2人の方がはかどるからだろ。」

ブラック「ああ。そうか。」

大神「じゃあ博麗神社に行こうか。」

ブラック「え？」

く博麗神社

霊夢「あら？大神、何か忘れ物でもしたの？」

魔理沙「大神？その後ろにいるの誰だぜ？」

レミリア「あらほんとね。」

ブラック「無理無理無理（小声）」

霊夢「こんにちは。あなたは誰？」

と霊夢が顔を除きこむと

ブラック「わぁー！くるな！」

霊夢「何？失礼ね。」

大神「ああこちらはブラック。魔法の森にいたんだ。」

魔理沙「魔法の森にいたのかぜ？」

大神「うん。どうやら巫女が苦手みたいで。」

霊夢「ふーん」

レミリア「よく見ると可愛いわね。」

レミリアが目をキラキラさせている。

レミリア「私はレミリア・スカーレットよ。よろしくね」

ブラック「ああ。よろしく。レミリア・スカーレット」

どうやらまだ幻想郷を支配する気はないようだな。

魔理沙「で何しにきたんだ？」

大神「ああ。実は仕事をしたいらしんだけど文はいるかい？」

文「あやややや。誰か呼びました？」

???「速すぎですよ。文さん。」

文「あなたが遅いんです。ほむらさん」

大神「おお。文とほむら。」

文「お呼びですか？」

大神「ああ。バイトの人見つけたよ。」

文「それはそれは。で誰ですか？」

ブラック「俺だ。文。」

文「えつと。誰ですか？」

ブラック「ああすまない。俺はブラックだ。」

やべえ普通にヤンデレ・スカーレットの状態で話してた。

文「まあとにかく働いてくれるんですね！」

ブラック「ああ。必ず成功させるぜ。」

ほむら「しかし俺達以外にも烏天狗がいたのか。」

ブラック「俺は、堕天使なんだが。」

霊夢&魔理沙&レミリア&ほむら&文「堕天使!？」

5人が同時にびっくりした。

ブラック「ああ。なんだよ。おかしいか？」

霊夢「堕天使なんて種族聞いたことないわ。」

ブラック「まあな。それはまあ今度で仕事しますか。」

文「じゃあこれ南の方に配って下さい。」

そうゆうと80枚の新聞を渡された。

ブラック「よいしよと。じゃあ行ってくるよ。」

一同「いつらっしやい。」

↳南側に到着

ブラック「南側に来ただけど森が多いな。」

ブラック「あそこに家があるな。言ってみるか。」

トントン（ドアをノックする音）

ブラック「誰かいますか？」

???「はい？えつとどちら様？」

ブラック「初めてましてブラックつていいいます。」

南「こんにちは。私は南よ。よろしく。」

ブラック「よろしくお願いします。」

南「そんなにかしこまらなくてもいいのよ。」

ブラック「そうか。ああこれ新聞だ。」

南「ありがとう。どんなニュースかな？」

南「うーんつとヤンデレ・スカーレット疾走？」

ブラック（はあ!?何書いてんだよあの野郎!）

南「誰かしらヤンデレ・スカーレットって？」

ブラック「だ、誰だろうね？」

ブラック「俺は、そろそろ仕事に戻らなきゃ。じゃあ！」

南「頑張ってるね！」

ブラック「はあー。(ため息) なんでよりによって俺の事書くのかな？」

↳ 数時間後

↳ 博麗神社

ブラック「ふう…仕事終わった。」

文「お疲れ様。はいこれ。」

文は、俺に紙袋をくれた。

ブラック「これは？」

文「手伝ってくれたお礼よ。」

中身を見るとお菓子やら木の実やら色々入っていた。

ブラック「ありがとう。ありがたく食べるよ。」

文「別にいいのよ。」

大神「バイトしたけどどうだった？」

ブラック「友達が増えたかな。」

大神「誰だ？」

ブラツク「えっと四季映姫さん、幽香さん、小町さん
後、南さん」

大神「え？南に会ったのか？」

ブラツク「うん。もしかして知り合い？」

大神「ああ。友達だ。」

ブラツク「そっか。じゃあ今日は、帰るよ。」

大神「そうか。またね。」

文「バイバイ！」

ブラツク「バイバイ！」

く夜、魔法の森にてく

ブラツク「はあく疲れた。文からもらった木の実でも食べるか。」

モグモグ

ブラツク「この木の実美味しいな。」

ガサガサ！

ブラツク「なんだ！………」

???「どこを見ているの？」

ブラック「しまった！後ろか！」

ザシュツ！（刀で切った音）

ブラック「うあ！なん…だ。お…前は、誰だ？」

俺は、背中を切られた。

月夜「私は月夜。桜。黒き狐よ…。」

その狐は黒く美しい狐だった。

ブラック「何故、俺を殺そうとする？」

月夜「あなたが悪いのよ。大神に近づいているから。」

ブラック「は…あ？どうゆう事だ？」

月夜「分かっているのよ…。あなたはヤンデレ・スカーレットでしょ？私の大神を取らないで！」

ザシュツ

ザシュツ

ブラック「……………」

月夜「死んだわ。これで邪魔するやつは後、少し…。」

月夜は、森の奥に言った。

ブラック「はあく酷いな。俺を何故殺すんだよ。」

ブラック「無限コンテナニューが無かったら死んでたぞ。」
俺の能力は、死んでも無限に生き返ることが出来る。

ブラック「それにしても一体何ものなんだろう？」

「次の日」

ブラック「よいしょつと」

魔理沙「ん？ブラックじゃないか！何してるんだぜ？」

ブラック「魔理沙か。今、俺は起きたんだ。」

魔理沙「そうか。なあ一緒にキノコ採りに行かないか？」

ブラック「へ？」

第4話 キノコ採りと不思議なマジシャン

第4話 キノコ採りと不思議なマジシャン

魔理沙「遅いぜー！ブラック！」

ブラック「待ってくれ。魔理沙、速すぎるよ。」

魔理沙「キノコ採りは、楽しいからな。早くしないと日が暮れるのぜ。」

ブラック（つて言ってもまだ1時くらいだぞ。）

魔理沙「さあキノコをいっぱい採ろう！」

く少し森を進んでく

魔理沙「よし！ここら辺にしよう。」

ブラック「ここでキノコ採りをするのか。」

回りは、草や木がたくさん生えておりいかにも魔理沙だけが知ってるキノコ採りをする場所のようだった。

魔理沙「さあ籠いっぱいキノコを採ろう。後でまた合流しようぜ。」

ブラック「ああ分かった。」

「頑張つてキノコ取りますか。」

ザツザツザツ（森を歩いている音）

ブラック「これはキノキタケか。これはキラキラタケ。色々あるな。」
俺はある程度キノコの名前を知っていた。

シユツ（何かが飛んできた音）

ブラック「うお！なんだよ！誰かそこにいるな！」

「……心配が消えた。一体なんだ？」

地面には先程飛んできたものがあつた。

ブラック「なんだこれ？カード？なんか書いてあるな。」

「拝啓、ブラック様。あなたと一緒にカードゲームをしたい。人里に来てください。マ

ジシャンより」

ブラック「カードゲームか……。キノコ採りやってからにしよう。」

く数時間後く

魔理沙「いっぱい採れたぜ！」

ブラック「俺もだ！見てくれ」

俺は、籠いっぱいのキノコを見せた。

魔理沙「凄いじゃないか！ブラック！」

ブラック（ドキッ）「そ、そうか……。照れるな／＼。」

なんだこの気持ちは？

魔理沙「じゃあ帰ろうぜ！」

ブラツク「ああ。わかった。」

　　魔理沙の家

魔理沙「じゃあ早速キノコシチューでも作るか！」

ブラツク「…魔理沙。あのさ俺用事あるからまた来るよ。」

魔理沙「そうなのか…。じゃあ夜になったら来てくれ。霊夢や大神も呼んで。」

ブラツク「わかった。じゃあ夜になったら来るよ。じゃあね。」

魔理沙「じゃあな。」

ブラツク「人里か。よし！行くぞ！」

俺は飛んで人里へ向かった。

ブラツク「ここら辺だがどこだろう？」

霊夢「あれ？ブラツクじゃない。」

???「ん？ああ霊夢が言ってた人かい？」

ブラツク「うっ…霊夢。」

霊夢「何？そんなに私が嫌い？」

こーりん「まあまあ霊夢。こんにちは。僕は、香霖堂の店主、森近霖之助だ。よろし

く。気軽にこーりんと呼んでくれ。」

ブラック「はい。ブラックだ！よろしくな。」

こーりん「君の事は、霊夢から聞いてるよ。今度、うちで働いてみない？」

ブラック「え？いいんですか？」

こーりん「いいよ。2人の方が仕事が捗るし。」

ブラック「ありがとうございます！」

霊夢「おしやべりはそれくらいにして何故ここにいるの？ブラック。」

ブラック「実はこのカードで人里に来て書いてあるから来たんだ。」

霊夢「あら。私も持つてるのよ。」

ブラック「え？マジかよ。」

???「さあ役者は揃った。イツツカードゲームだ！」

そこには仮面を付け胸のシャツにスペードのマークが書いてあるタキシードの男が立っていた。

ブラック&霊夢&こーりん「えつと誰ですか？」

スペード「私の名前は、マジシャン・スペード。よろしく。」

ブラック「俺達を呼んだのはお前か？」

スペード「その通り…。君達とโป๊กเกอร์がしたい。」

ニヤリと表情を浮かべた。

ブラツク「ポーカーか…。」

霊夢「私やつてもいいかしら？」

スピード「最初の挑戦者は君か。いいよ。じゃあゲームを始めよう。」

〈30分後〉

霊夢「負けたー！ー！ー！」

スピード「弱いね。君は。じゃあ君の記憶を貰うよ。」

そう言ううとマジシャンは、瓶を霊夢に向けた。

霊夢「え？」

霊夢の頭から丸い玉が瓶の中に入った。

霊夢「……………。私は誰？」

ブラツク「はあ？ 霊夢しつかりしろ！」

霊夢「…………。」

霊夢が喋らなくなった。

ブラツク「てめえ。霊夢に何をした？」

スピード「記憶を全てもらっただけさ。この瓶は、人の記憶を吸い取ることが出来る。

他にも色んな人を取った。私は勝負を申し込みその人とポーカーをし記憶を取る。

そしてその記憶は私を強くする効果がある。ちなみに勝負を見てわかると思うけど私はロイヤルストレートフラッシュしか出せないのだよ。イカサマは一切ない。さあ次は誰かな？」

ブラック「……………俺だ。」

スペード「君か。君の記憶も頂くよ。」

ブラック「こーりん。霊夢を頼む。」

こーりん「無理だ！その勝負をやめるんだ！」

俺はこーりんの方を向き「大丈夫だ」サインとしてウインクをした。

スペード「じゃあ5回勝負というこうか。」

ブラック「ああ。分かった。その代わり条件がある俺が勝ったらみんなの記憶全て元に戻せ。」

スペード「わかりました。私が勝ったら君の記憶全て貰いますよ？」

ブラック「ああ構わない。あっシヤツフル俺がしてもいいか？」

スペード「いいですよ？ではスタートです。」

スペードがカードを配り終えた。

スペード「さあどうする？」

ブラック「2枚変える。」

俺はカード2枚出した。

スピード「はい。どうぞ。」

スピード「じゃあせーのでいくよ。せーの！」

ブラック「ロイヤルストレートフラッシュ。」

スピード「2ペア…。」

ブラック「俺の勝ちだ。」

こーりん「どうゆう事だ？」

ブラック「早く続きを」

スピード「はい。」

く50分後く

ブラック「諦めたらどうだ？5回勝負でお前は、4連敗…。どう足掻いても勝ち目なし。」

スピード「最後の勝負です。これで勝ったら私の勝ちにしてください！」

ブラック「……。いいよ。俺も鬼じゃない。最後の真剣勝負だ！」

スピードがカードを配った。

ブラック「……。。」

スピード「……。いきますよ？せーの！」

スピード「ロイヤルストレートフラッシュユ！」

こーりん「これはやばい！」

スピード「私の勝ちです！」

ブラツク「バーカ……。ウルトラロイヤルストレートフラッシュユ！」

スピード「なん……。だと！」

ブラツク「俺の勝ちだな。」

こーりん「凄いやないか！ どうゆう事なんだい？」

スピード「教えてくれ……。なぜ4回もロイヤルストレートフラッシュユ。最後にウルトラロイヤルストレートフラッシュユ出せたのか。そしてなぜ俺はロイヤルストレートフラッシュユが出せなかったのか。」

ブラツク「それはお前がよく知ってるんじゃないか？」

スピード「うう……。」

こーりん「一体どうゆう事だい？」

ブラツク「あのカードは、欠点がある。カードを戻す時大抵の人はカードを全てそのまま返し1番上に置きまたシャッフルするだろ？俺はあえてカードの山札を借りてバラバラにカードを山札に入れた。そうすると、カードのバランスが崩れカードでロイヤルストレートフラッシュユが出なくなる。しかもこいつに関しては相手を挑発して最初

は勝たせる、しかし後で全部自分勝つという勝負をしてくる。嫌なやつだ。」

こーりん「なぜ君は、勝てたんだい？」

ブラック「昔から、ポーカークやりまくってたからどのカードをどう出せば勝てるか知ってたからな。」

スペード「さすがです。はい。約束通り記憶を返します。」

記憶がなくなつた人の記憶が戻つた。

霊夢「あれ？私は今まで何を？」

こーりん「霊夢戻つたのか！」

霊夢「あれ？こーりん私は何を？」

こーりん「よかつた戻つて。」

霊夢「??？」

スペード「後、ブラック様これを…。」

ブラック「ブラックでいいよ。で何これは？」

スペード「スペードの1とナイフです。カードは特殊な事が起きます。ナイフは、武器です。何かの時間にお使いください。」

ブラック「ああ。ありがとう。」

スペード「また会える事を楽しみにしてますよ。」

ブラック「またポーカーやろうな！」

スペード「ええ。では！」

そうゆうと風と共にスペードは、消えた。

霊夢「ブラック。ありがとうね。」

ブラック「う、うん……。別に……。」

大神ジーツ（ブラックをジツと見ている。）

「なにか違和感がある。少しブラックを調べてみるか。（小声）」

ブラック「ん？おーい！大神！何してんだ？」

大神「いや別に。たまたま人里を歩いてただけだよ。」

ブラック「あつ！そうだ霊夢と大神。魔理沙の家に行かないか？呼ばれたんだ。」

霊夢「魔理沙が？呼んでるの？」

ブラック「ああ。こーりんも一緒に来るか？」

こーりん「僕は店があるからいいよ。また今度にするよ。」

ブラック「そうか。じゃあ行こうか。じゃあね。こーりん！」

こーりん「うん。バイバイ。」

そう言つて俺達は魔法の森へと向かった。

第5話　こーりんの手伝い

第5話　こーりんの手伝い

ブラックと霊夢と大神は、人里から魔法の森に直行し魔理沙の家についた。

ブラック「魔理沙く。いるか？」

魔理沙「来たか。ブラック。今、ちようど出来たんだけ！」

ブラック「ああいい匂いがするな。キノコシチューか？」

魔理沙「ああそうだけ。とてもいい出来だけ。入ってくれ。」

魔理沙は、そう言つて俺達を家の中に入れてくれた。

ブラック&霊夢&大神「お邪魔します。」

ブラック（最初来た時とは変わってないな。）キョロキョロ

魔理沙「ブラックは、初めてだよな。私の家に来るの。」

どうだ？感想聞かしてくれよ。」

ブラック「なんとゆうか……。いかにも魔法使いの家つて感じだな。」

魔理沙「そりゃ魔法使いだからな。普通の人とは違う家だろうな（笑）。」

ブラック（ところどころにパチエの本があるな。）

魔理沙「じゃあキノコシチューを食べようか。」

ブラック「ああ。食べようか。」

大神、霊夢、ブラックはそれぞれの席に座りキノコシチューを待った。

霊夢「そういえば、ブラックはどこに住んでるの？」

霊夢がおむろに聞いてきた。

ブラック「別に何処に住んでいようと俺の勝手だろ…。」

大神「ブラック。俺も知りたい。お願いだ教えてくれ。」

ブラック「…わかった。魔理沙の家のすぐ近くに家より大きな木があるだろ？その上に住んでるんだ。」

大神「木の上か。雨とか時大丈夫なのか？」

ブラック「実は木の中にある程度小さな秘密基地見たいのがあるから大丈夫なんだ。」

霊夢「へえー…子ども見たいね。」

魔理沙「持って来たぜ！」

ドン！（机に鍋をおいた音。）

ブラック&大神&霊夢「うおおお…美味しいそうだね。」

魔理沙「さあ食べてくれ！」

ブラック&大神&霊夢「いただきます！」

俺達は、大きな鍋からシチューを取った。

魔理沙「キノコの種類が豊富だからな。一杯食べてくれよ？」

ブラツク「ああ。ちなみに何種類入ってるんだ？」

魔理沙「えーつと…15かな？」

ブラツク「なんていうキノコが入ってる？」

魔理沙「まず、キノキタケ、シャンパンタケ、バグタケ

アラシタケ、カミベン、ブロリータケ、サザンタケ等だぜ。」

ブラツク「毒なしだな。少し疑ってしまった…すまない。」

魔理沙「大丈夫だぜ。私はこれでもキノコの種類を何回も見分けてきたんだぜ。それ

くらいは大丈夫なんだぜ。

じゃあ私も食べようかな。」

大神「ん〜。シャンパングラスの形してるキノコ美味しいな。……………あれ？ブラツク

ク？」

ブラツクの方を見てみると何だかレミリアに似た姿の奴がうつすらと見える。

ブラツク「どうした？そのキノコの名前か？そのキノコは、シャンパンタケよ。」

大神「ああ。そうか…。」

女口調だな？誰だ？紅い髪に赤い目…？

霊夢「どうしたの？大神？」

大神「いや…なんでもない。」

ブラツク「ん？ああ多分バグタケのせいだ。食べると多少姿が変わったりするからな。間違えて俺が食べたんだ。」

大神「ああ…。そうゆうことか。」

～30分後～

ブラツク&大神&霊夢&魔理沙「ごちそうさまでした！」

ブラツク「魔理沙ありがとうな。今日は、ご飯作って貰って。」

魔理沙「また、よければ作るぜ。」

ブラツク「ありがとうな。じゃあ明日！」

霊夢&魔理沙&大神「また明日ね。」

ブラツク「よし。明日はこーりんの店に行くか。」

大神「……………。あの姿もしかして…。」

～次の日～

ガラガラ（スライド式のドアの音）

こーりん「いらっしやいませ〜。」

ブラツク「よっ。こーりん。」

こーりん「ああ、ブラックくんかい？お店の手伝いしに来たのかい？」

ブラック「ブラックでいいよ。暇だからな。しかし色んな物が置いてあるな。」
見ると電化製品や刀、さらには魔道書まで売つてある。

こーりん「うん。最近やたらと落ちてるんだよ。パソコンとか折りたたみ式ケータイとか。」

ブラック「へえー。この紫色した刀は？」

こーりん「どうやら謎の力がやどつているようだね。」

確かに見ると禍々しいし霧囀気を醸し出している。

こーりん「じゃあ手伝つて貰おうかな？」

ブラック「ああ。俺は何をすればいい？」

こーりん「そうだな…。接客してもらおうかな？」

ブラック「わかった。こーりんは？」

こーりん「僕はちよつと用事があるからお店は、頼んだよ。」

ブラック「えつ。ああわかった。」

そうゆうとこーりんは、店出て行つた。

ブラック「暇だな。客も来ないし…。」

俺は、近くにあつた雑誌を読み始めた。

大神「おい。ブラック。」

ブラック「なんだよ。大神。音も無く入って来んな。なにか探してんのか？」

大神「ブラックに聞きたいことがある…いや、やめよう。」

ブラック「なんだよ。言えよ。」

大神「お前もしかして…。」

ガラガラガラ！

???「おい！ここにケータイ落ちてなかったか？」

ブラック「パソコンの横にあるやつか？」

???「おお！これだよ。」

ブラック「落とし物だったか。売り物だが元々お前の物だったなら持つていけ。」

???「ありがとう。じゃあな…ブラック。」

ブラック（！）「何故俺の名前を？」

そう言った時にはもうその人物は、いなかった。

ブラック「大神！追いかけるぞ！嫌な予感がする。」

大神「おい！店は？」

ブラック「えつと…。こいつに任せろ。」

そうするとブラックの影から黒いブラックが出てきた。

ブラック「頼んだぞ。」

ブラック（影）（頷く）

大神「そんな能力もあるのか…。」

ブラック「行くぞ！大神！」

大神「ああ！」

第6話 墮天使と狐と旅人と…

第6話 墮天使と狐と旅人と…

く魔法の森上空く

??? 「おい！ロードバードもつとスピードでないのか？」

ロードバード 「ムリデス。コレイジヨウダストオーバーヒートシマス。」

??? 「仕方ねえな。」

そう言うのとケータイを取り出し「バイク」と書かれたボタンを押した。

ロードバード 「バイクモード！」

ロードバードがフライモードからバイクモードに変形した。

??? 「よし。これなら少し早く着くだろう。」

ブロロロロロ (バイクの音)

妖精A 「なんなのあれ？」

妖精B 「さあなんだろうね？」

く魔法の森の中心く

??? 「よし。おい！そこのお前！久しぶりだな…スペード！」

スペード「おやおや。これはこれはフェイトくんじゃないか。」

フェイト「俺は、お前を探してた。闘いを申し込むために。俺と勝負しろ！スペード！」

スペード「わかりました。では少し遊んであげましょう。」

フェイト「さすがだ。先手必勝！」

そう言うのとケータイを傾けて5のボタンを押した。

「ガンモード！」

ケータイが銃の形に変形した。そしてフェイトは、スペード目掛けて銃を打った。

スペード「やれやれ。学習しないねえ。」

スペードは、スペードの4のカードを持っている。カードのバリアで銃弾を防いだよ
うだ。

フェイト「うるさい！これならどうだ！」

次に8のボタンを押した。

「ガトリングモード！」

ガンからガトリングに変わった。

フェイト「おらー！」

思いっきりガトリングをぶっぱなしている。

スピード「よっ！はっ！とう！あたらないねえー。」

スピードは全部、銃弾を避けている。

スピード「私の番だね。」

そう言うのとスピードは、スピードの6を取り出した。

スピード「チェンジタイム！」

「チェンジタイム！ソードブレイド！」

スピードの6がナイトが持っているような剣になった。

スピード「行くぞ！はっ！」

フェイト「あぶねえ！おい！人の顔に剣を突き出すんじやねえ！」

スピード「これはあくまで勝負…死なないから安心して？」

フェイト「くそ！ロードバード！」

ロードバード「ノツテクダサイ！」

フェイトは、バイクにのりスピードに向かって走り出した。

ブラック「やめろー！」

ドン！

ブラックは、思いつきりバイクにあたった。

ブラック「うっ！がは！」

大神「ブラック！大丈夫か！」

ブラック「大丈夫…だ。」

ブラックは、そう言うのと消えてしまった。

すると大神の目の前に土管が出てきた。そこからブラックが現れた。

ブラック「俺は、死なないからな…。」

フェイト「なんだ！あいつは死んだんじやないのか？」

フェイトは、驚いた様子だった。

スパード「ほう。これは驚いた。」

ブラック「俺は、無限にコンテニュー出来る。何度死のうが戻って来るのさ。」

フェイト「なん…だと…!？」

ブラック「フェイトと言ったな。戦いをやめろ！」

フェイト「何故だ？俺は、あいつに勝たなきやならない！」

ブラック「まだ戦うようならば、容赦なくお前を倒す。」

フェイト「やれるもんならやってみる！」

ブラック「大神…。手を貸せ。あいつを止めるぞ！」

大神「わかった。よし…。」

俺は、ナイフを取り出し、大神は、刀を抜いた。

ブラック「よし行くぞ！」

俺は、フェイトに切りかかった。

しかし、ヒラリとかわされた。

フェイト「お前ら武器はナイフと刀か。じゃあこっちは…。」

フェイトは、1のボタンを押した。するとケータイの形がビームソードみたいな剣になった。

フェイト「はっ！とう！」

フェイトは、俺の目の前にビームソードを振りかざしてきた。

ブラック「危ねえ！あいつ剣も銃も使えるのか。」

俺は、空に飛んだ。すると大神の方にフェイトは、バイクで走り出した。

フェイト「おらあああああ！」

大神（！）「くっ！」

大神は、その場に立ち止まってしまっている。

ブラック「やばい！間に合わねえ！」

ドン！

大神「うわあああ！」

大神は、フェイトのバイクのタイヤが思いつきりあつた。

すると大神の姿が透けていつている。

ブラック「大神……。まさかお前……。」

この世界では死ぬ瞬間には透けるのである。

ブラック「……。大神。」

俺は、心の底から怒りの様な憎しみの様な力が湧きだしてきた。

ブラック「フェイト……。俺は、お前を許さねえ。絶対にな。」

フェイト「はっはっはっはっ！その大神という奴はあっけなかつたな。」

ブラック「……。……。す。」

フェイト「なんか言ったか？」

ヤンデレ「お前を殺す！」

俺は、姿を変えヤンデレ・スカーレットになった。

フェイト「その姿は！」

スピード（！）

ヤンデレ「危険「スピア・ザ・ブレイク」！」

俺は、怒りをあらわにしてフェイトに向けて無数のグングニルと弾幕を打った。

フェイトは、とっさに行動できず弾幕とグングニルにかすった程度に当たっていた。

フェイト「う」っ！はあ……はあ……。ロードバード！逃げるぞ！」

ロードバード「リョウカイ！」

フェイトは、ロードバード（フライモード）にのり空へさ逃げようとした。

ヤンデレ「逃がさない！はあ！」

ヤンデレ・スカレットは、フェイトを追いかけロードバードに弾幕を打った。

ロードバード「ウワワワワ！」

ロードバードがバランスを崩した。

ヤンデレ「今だ！神槍「スピア・ザ・グングニル」！」

ヤンデレは、一直線にフェイト目掛けてグングニルを放った。

フェイト「危ねえ！ははは！当たらなかつたな！」

フェイトは、笑っている。

ヤンデレ「……………」」（ニヤリ）

するとフェイトの後ろにコンテナ用土管が。そこからなんと大神が出て来た。

電光 光の姿でフェイトを切りつけた。

大神「真剣「一刀両断」！」

フェイト「うわあああああああああああああ！」

フェイトは、地面目掛けて落ちていく。

俺は、姿をブラックに戻しフェイトを助けた。

フェイトは氣を失っている。

ブラック「ふう……。これでフェイトも大丈夫だろう。」

俺は、フェイトのおでこに幸福の呪文を言った。

大神も姿が戻っていた。

ブラック「スピード。フェイトを頼む。」

スピード「ああわかったよ。君達は？」

ブラック「俺は、仕事に戻る。」

大神「俺は、南の所にも行こうかな？」

大神は、ボロボロの姿で言った。

ブラック「じゃあな。スピード、大神。」

大神&スピード「またな。じゃあね。」

く香霖堂く

こーりん「やあただいまく……。あれ？ブラック黒くなった？」

ブラック（影）（横に首を振る）

ガラガラ：

こーりん「いらつしや……。あれ！ブラックどうしたの！服はボロボロだし。傷は、あ
るし。とりあえず手当をしないと。」

「10分後」

こーりん「そんなことがあったんだね。大変だったでしょう?」

ブラック「大丈夫だ。慣れてるからな。ハハッ。」

俺は、頭と左腕に包帯を巻かれた。どうやらバイクと弾幕の性だ。俺の弾幕は、打つた後どこに飛ぶか分からない変化球並の弾幕なのだ。

こーりん「今日は、どうする?」

ブラック「こーりんの家に止めてもらってもいいか?」

こーりん「ああ。構わないよ。」

ブラック「ありがとう。こーりん。」

番外編

第6・5話（番外編）
みんなで温泉旅行（前編）

第6・5話　みんなで温泉旅行

～紅魔館～

ヤンデレ「レミリア！」

レミリア「何？お姉様。何だか楽しそうね。」

ヤンデレ「分かる？実は…温泉旅行のチケットもらったのよ。」

レミリア「本当！みんなを呼びましょう。」

～10分後～

ヤンデレ「このチケットよ。」

ヤンデレは、チケット15枚取り出した。

咲夜「このチケットどうしたのですか？お嬢様。」

ヤンデレ「えっ…と…。」

作者「よいしょと。それについては俺が話そう。」

咲夜「誰！」（ナイフを持った）

咲夜は、俺にナイフを向けた。

作者「おいおい。やめろよ。チケットの事が知りたいんだろ？」

ヤンデレ「咲夜。やめなさい。」

咲夜「承知致しました。」

作者「では：話をしよう。俺は、この話を作っている作者だ。今回ヤンデレ・スカレットが「温泉旅行に行きたいな」と言ってるので私がチケットを渡した。」

咲夜「そういうことですか。では何故15枚も渡したのですか？私達は妖精メイドを除くと7人なのですが？」

作者「幻想郷のみんなを連れていくためだよ。温泉旅行は、貸し切りだからな。みんなで言った方が楽しいだろ？」

咲夜「何か企んでいるんですか？」

作者「別に考えちゃいねーよ。」

咲夜「……わかりました。」

作者「疑り深いな。まあそう言うことだ。じゃあな。」

そう言ううとスキマに消えて言った。

咲夜「……………」

フラン「ねーねー。誰、呼ぶの？」

ヤンデレ「うーん。霊夢や魔理沙は、決まっているのよね。大神とか他には…。」
　　5分後

ヤンデレ「こんな感じかしら？」

ヤンデレ・スカーレットは、紙を出した。

メンバー

ヤンデレ、レミリア、フラン、咲夜、パチュリー、小悪魔、美鈴、霊夢、魔理沙、大神、スピード、フェイト、

月夜、こーりん、南

レミリア「じゃあみんなを呼びましょう！」

　　魔法の森

ヤンデレ「来てくれるかしら？」

魔理沙「わかったぜ！今すぐ準備するぜ。」

ヤンデレ「じゃあまた後で。」

フェイト「温泉旅行？しやーないな。スピード行こうぜ。」

スピード「そうだね。楽しそうだし。行こうか。」

ヤンデレ「紅魔館前集合。よろしくね？」

　　博麗神社

咲夜「ということなの。」

霊夢「わかったわ。ここんとこ異変解決で疲れたしね。」

大神「温泉か。楽しそうだね。」

く香霖堂く

ガラガラ

ブラツク「よう！こーりん！」

南「あれ？ヤンデレちゃんじゃん！」

月夜「ヤンデレか。久しぶりだな…。」

ブラツク「おおい。この状態ではブラツクつてよんでくれ。んで言いたい事があつてさ。温泉旅行に行かない？」

南「いくいく！」

月夜「温泉旅行…。大神も行くのか？」

ブラツク「ああ。もちろん。」

月夜「じゃあ行く！」

ブラツク「こーりんも来てくれ。」

こーりん「わかったよ。少し待っててくれないか？」

ブラツク「ああ。わかった。」

く紅魔館前く

ヤンデレ「みんな揃ったかしら？」

咲夜「はい！お嬢様。」

ヤンデレ「わかった。作者！来なさい！」

作者「なんだよ。」

ヤンデレ「温泉へのゲートを作りなさい。」

作者「はいはい。よいしよと。」

そう言うのとドアを空气中に描き実態がでてきた。

作者「じゃあ行つてらっしゃい。」

一同「行つてきます。」

くドアの中の空間く

魔理沙「楽しみだな。ヤンデレ！」

ヤンデレ「そうね。魔理沙。」

咲夜「お嬢様は、温泉に行かれたことがあるんですか？」

ヤンデレ「私は、あるわよ。レミリアとフランも。」

レミリア「あの時はよかったわね。枕投げなんかして。」

ヤンデレ「途中でフランが「弾幕ごっこだ！」なんていいだしたから、私が止めたの

よね。」

フラン「そうだったねー。」

そうこうしてるうちにドアが見え一人の学生が立っていた。

学生「ようこそ。今回の温泉旅行をどうぞお楽しみ下さい。旅館は、貸し切りですの
で。」

霊夢「あんた誰？」

学生「作者の方から言わなくていいと言われているので答えません。」

霊夢「まあいいわ。」

学生「ではどうぞ。」

ガチャ

く旅館の前く

一同「おおく!すごい!」

旅館は、和風の建物で春でもないのに桜の木があり桜が咲いている。

ヤンデレ「綺麗ね。」

旅館に入ると女性が一人立っていました。

カラクレ「ようこそいらつしやいました。お話は聞いております。申し遅れました。

私は、カラクレと申します。よろしくお願いします。お部屋にご案内します。」

作者「ああ。よろしく頼むぞ。」

ヤンデレ「わあ！いつ来たの？」

作者がいつの間にかいた。

作者「ついさつき。」

ヤンデレ「チケツトは、大丈夫なの？」

作者「まあ細かいことは気にするな。」

カラクレ「こちらがお部屋です。」

フェイト「5部屋あるから一部屋3人だな。」

こーりん「どうするのかな？」

作者「部屋割りには、俺が考えてもいいか？」

ヤンデレ「いいわよ。」

作者「じゃあこんな感じだな。」

101号室

ヤンデレ、レミリア、フラン

102号室

大神、月夜、南

103号室

作者「ふう。カラクレ俺の部屋は、あそこだよな？」

カラクレ「はい。開かずの間です。本当にいいんですか？」

作者「大丈夫！友達だから。」

カラクレ「わかりました…。」

作者「じゃあな。」

カラクレ「大丈夫かしら？」

〜1時間後〜

コンコン

レミリア「お姉様。誰か来たわ。」

ヤンデレ「わかったわ。ちょっと待ってなさい。」

ガチャ

ヤンデレ「誰かしら？」

作者「ヤンデレ。少し時間いいか？」

ヤンデレ「作者か。いいわよ。」

作者「ありがとう。」

ヤンデレ「で、何よ。告白だったらグングニルで刺すからね。」

作者「ちげえよ。俺の部屋は、開かずの間だからみんなに伝えといてくれ。実はその

部屋幽霊が出るらしからさこのことはみんなには言わないでくれ。」

ヤンデレ「あなたの部屋は、幽霊が出るのね。面白そうね。私も付き合っていていいかしら？」

作者「んゝ：仕方ない。お嬢様の頼みだ。俺の部屋に来ていいよ。」
ヤンデレ「ありがとうね。じゃあみんなで温泉に入りましょうか。」

作者「そうだな。みんなを集めよう。」

ゝそして温泉へゝ

作者「んじゃ。風呂に入りますか。」

男性脱衣場

スピード「よいしょと。これでよし。」

フェイト「待て待て待て。」

フェイトがスピードを止めた。

スピード「なんだい？」

フェイト「なんで仮面取らねえんだよ。」

スピード「素顔は、晒す気は無いからね。」

フェイト「いいからとれ。」

フェイトが仮面を剥がそうとする。

スピード「やめろ！剥がすな！」

こーりん「フェイトくん。やめてあげなよ。スピードくんが嫌がつてるだろ？」

ブラック「そうだ。止めてやれ。」

作者「なあブラック。なんでヤンデレ・スカーレットの状態じゃないんだ？」

ブラック「女の人がいっぱいいると安らげないからな。」

作者「なんだ。そう言うことか。」

女性脱衣場

レミリア「温泉なんて久しぶりね。」

フラン「お姉様も一緒に入りたかったな。」

咲夜「パチュリー様はちよつと具合がよろしくないのでお部屋で休んでおります。小

悪魔が看病中です。」

レミリア「あら。そうなの。せっかくの温泉なのに。」

霊夢「魔理沙。タオルある？」

魔理沙「忘れたのか？」

霊夢「うん。貸してくれる？」

魔理沙「いいぜ！はい！」

霊夢「ありがとう。」

大神「あのさ。月夜？なんでじつと見てるんだ？」

月夜「男口調だけどやっぱり女だよね。」

大神「ああ。それがどうかしたか？」

月夜「同性愛だね♡って思ってた。」

月夜は、まんざらでもなさそうだった。

大神「／／／。そう言うことはだな？」

南「むーっ。」（頬をふくらましている。）

「なんやかんやで風呂に」

ブラック「おお。結構広いな。」

スピード「さすが旅館って感じだね。」

フェイト「早く入ろうぜ。」

こーりん「まずは体と髪を洗おう。」

ブラック「そうだね。」

フェイト「なあブラック。」

ブラック「何？」

フェイト「お前さ髪の毛長くね？腰くらいまであるじゃん。」

スピード「正直、私も初めてあった時は思ったよ。」

ブラック 「分からないけどこの姿になると髪が伸びるんだ。」

フェイト 「どうゆう原理なんだろうな。お前リンスも使うのか？」

ブラック 「髪を綺麗にしたいからね。」ゴシゴシ

フェイト 「その割にはいつも所々跳ねてるよな。」

ブラック 「まあしかないんだ。髪に關しては。」

こーりん 「髪を結ばないのかい？それだけながいと邪魔だろ？」

ブラック 「髪が痛むからやなんだ。でもやってみるか誰かゴム持つてるか？」

スピード 「一応あるけど使うかい？」

ブラック 「ありがとう。風呂上がったら使うわ。」

作者 「じゃあみんな風呂入ろうか。」

ブラック 「ふうー。生き返るな。」

フェイト 「はあく気持ちいい。」

こーりん 「本当だねえー。」

スピード 「……………」

作者 「そういえばここの露天風呂は、「混浴」らしいぞ。」

フェイト 「はあ!？」

スピード (ブクブク) お湯に顔をつけている。

こーりん「ええ？ええ？」

ブラック「へえー。」

作者「まあ実際女性入るのもいいじゃない？知り合いなわけだし。」

フェイト「ブラックは、平然としすぎだろ。」

スピード「元々、女だからでしょう。」

作者「じゃあ露天風呂行こうか。」

一方、女性の方では

一同「うわー！綺麗なお風呂！」

フラン「早く入ろう！」

咲夜「お嬢様。その前に体を洗いましょう。」

レミリア「大神！聞いていいかしら？」

大神「何？レミィ？」

レミリア「あたた体が獣じゃない？洗うの大変じゃないの？」

大神「最初は、大変だったよ。でも慣れればどうってことないな。」

南「私も同じよ。」

レミリア「月夜さんに関してでは体か人と同じだから洗うのは、大変じゃなさそうだけ
ど。」

月夜「月夜でいいわよ。そうね。確かに洗いやすいからだと思うわ。」
月夜の体は、白くてとても綺麗な肌だった。ヤンデレだとは、微塵も思わせない感じだった。

咲夜「お嬢様。洗い終わりましたよ。」

フラン「わーい！ありがとう。」

フランは、お風呂にダイブした。

ザバーン！

フランがダイブした事により風呂があふれた。

レミリア「フラン。お風呂で暴れちゃダメよ。」

作者（レミリア…貸し切りだから大丈夫だ！）

レミリア（こいつ…直接脳内に…！）

大神「はあ…。」

モニユ

大神「ひあつ!!?月夜何やつ…て…つ。」

月夜が大神の胸を揉んでいるのだ。

モニユモニユ

大神「ひっ…う…やめ…て」

南「ちょっと！月夜ちゃん何してんの？」

南が止めに入った。

月夜「大神の胸、私より大きい…。」（しよぼん）

月夜は、しよぼりしている。

大神「月夜にも取り柄はあるよ。綺麗な肌とか可愛い顔とか。」

月夜「そう？ありがとう。やっぱり大神…好きよ♥」

そう言う大神に抱きついた。

大神（困った奴だ。）

南　ゴゴゴゴゴ（怒）

霊夢「魔理沙、ここの露天風呂の話聞いた？」

魔理沙「何をだぜ？」

霊夢「ここの露天風呂「混浴」なのよ。」

一同「え？」

咲夜「混浴なのですか!？」

大神「それはつまり」

魔理沙「男と一緒に入ると言う事だよな。」

霊夢「そうよ。大丈夫よ、混浴くらい。」

「魔理沙「お前、よく平然といられるな。」

霊夢「男の方も平然いられてないでしょう。」

ブラツクは、平然だった。(元女)。

第6. 5話（番外編） みんなで温泉旅行（中編）

（露天風呂）

一同「……………」

そう皆は、わかっていた。こんなに気まずい展開になると。

フラン「お姉様。なんでみんな静かなの？」

ブラック「フラン。あのなこれは……」

霊夢「フラン。あまり深く考えない方がいいわよ。」

霊夢が助言をしてくれた。助かった。

フラン「わかったー。」

作者「どうせならさ。一人一人、男女で分け合って話したら？」

一同「え?!」

作者「嫌なら別にいいんだけど。」

霊夢「私は別に構わないわよ。」

魔理沙「私もだぜ！」

レミリア「たまにはいいでしょう。」

作者「じゃあ分けるぞ。」

小悪魔「ちよつと待つて〜。」

作者「こあか。なんだ？」

小悪魔「私も参加していいでしょうか？」

作者「別にいいよ。」

小悪魔「ありがとうございます。」

咲夜「小悪魔。パチュリー様は？」

小悪魔「パチュリー様は部屋で安静にしております。」

咲夜「そう…。では、初めてください。」

作者「わかった。では決めるぞ。」

ブラック、霊夢、魔理沙ペア

フエイト、咲夜ペア

こーりん、南、美鈴ペア

スピード、小悪魔ペア

大神、月夜ペア

レミリア、フランペア

作者「こんな感じだな。そして…レミリアと大神これ食べて。」

俺は2人にカプセル型の薬を渡した。

レミリア・大神「何これ？食べて大丈夫なのか？」

作者「大丈夫だ。えーりん先生の作った新作だ。」

大神（え〜。絶対やばいじゃん。必ず死ぬやつやん。）

レミリア「こんなに危ない薬飲めないわよ！」

作者「別にいいけどさ。その場合は、わかっているよなあ？」（ニヤリ）

作者（俺）は、不敵な笑みを浮かべて言っている。

レミリア「わかったわよ！飲めばいいんでしょ！」

大神「仕方ない飲むか。」

ゴクゴク…

作者「流石はえーりん先生だ！もう効果が現れている！」

大神「何を言って…え!？」

レミリア「ちよ…何よこれ!？」

なんとレミリアと大神は、男になっているのだ。

作者「この薬は、一時的に男になる薬だ。副作用があるがまあ大丈夫だろ。」

レミリア「もう恥ずかしいわ！」

大神「／／／／／。ッー！」

咲夜・南「お嬢様・大神をあんな姿にして許されるとでも？」

咲夜は、俺の首元にナイフを近づけ南どこからともなく刀を俺の目の前に振りかざして来た。

作者「危ねえ！やめろよ。ちよつとした悪ふざけみたいなものだよ。後ペアで組む時、あきらかに女性が多いからやっただけだ！だから咲夜と南？それをしまつて？」

咲夜「わかつたわ。」

南「次やつたら斬るからね？」

南は、見たことないような怖い笑顔だった。

作者「ひやい！」

ブラック「なあ。あんたは、参加しないのか？」

作者「ああ。俺はもうあがるから参加しない。じゃあみんな楽しんで。」

そう言うのと脱衣場の方へ作者（俺）行った。

ブラック「そんじゃ別れるか。」

くブラックペア

ブラック「なあ。霊夢風呂あがったらどうする？宴会まで時間あるぞ？」

霊夢「そうね。卓球でもやろうかしら？」

魔理沙「じゃあ私もやるぜ！」

ブラック「そうか。俺は、部屋に戻って牛乳飲もうかな？」

霊夢「あら？血じゃないのね？」

ブラック「さすがにここまで来て血は、飲まないよ。後この姿だと血は、必要じゃないみたいだ。」

霊夢「へえーそうなの。」

くフェイトペアく

フェイト「あんたは確かにナイフ使いだったよな？」

咲夜「ええ。そうだけど？」

フェイト「使いにくいのか？近接攻撃なのに。」

咲夜「別に使いにくいとは思わないわ。それに私は時間を止めることが出来るから戦闘には強いのか？」

フェイト「そうか…。じゃあ今度、手合わせを願おうかな？」

咲夜「わかったわ。全力でかかってきなさい！」

くこーりんペアく

こーりん「そう言えば南さんは、月夜さんのことをどう思ってるんだい？」

南「えーつと…。」

こーりん「さつきから月夜さんと大神くんにすごい殺気を感じさせてるんだけど…。」

南「それは月夜が大神にくつついてるから…。私だつて大神と…／＼／＼／＼。」
こーりん「嫌いではないんだね。よかった。」

南「え？」

こーりん「たとえ恋だろうが愛だろうが友情は、大切にね。」

美鈴「いいですね。友情。私も咲夜さんと友情…。」

こーりん・南（この人ナイフで刺されてるのが友情なのか？）

くスピードペア

スピード「君と会うのは初めてだね。私はスピードよろしく。」

小悪魔「はい。私は小悪魔です。よろしくお願ひします。」

スピード「こあは、トランプが好きかい？」

小悪魔「はい！私はパチクリー様とかレミアお嬢様と遊んでるので楽しいです。」

スピード「トランプは、あそぶだけじゃなく武器にも使えるよ。こんなふうだね。」

スピードは、スピードの13 (King) カードを剣にした。

小悪魔「すごいですね！私にも今度教えてください！」

スピード「いいでしょう。教えて上げましょう。」

く大神ペア

大神「……………」

月夜「大神♡」

大神「暑苦しい…。」

月夜「いいじゃない？大神が男になったんだから私と結婚しても問題ないのよ？」

大神「あのさあ。この薬は、一時的なものだからいつかは戻るんだよ？」

月夜「大丈夫！またえーりとやらに永遠に男になる薬を作らせればいいんだから。」

大神「男になんかなくてたまるか！だいたい月夜の考えは、俺と一方的に付き合っていたらって考えだろ？だから…ひゃあ！」

月夜が後ろから抱きつき大神が男と言うのを構わず胸を触り始めた。

月夜「男でもここが弱いのは変わらないのね？それ♪」

大神「ひゃ！…うっん…やめ…南に怒られ…ひゃう。」

月夜「大丈夫よ。今はペアなんだから。しかもここからじゃ南ちゃんは、私達のやっていることも見えないから。」

大神「いいかげん…に…」（ダメだ…体が欲しがってるっ…）

月夜「そうよ…。大神…私に体をあずけなさい。」

大神「はあ…はあ…。」

レミアアペア

フラン「お姉様。男になったけど気分は？」

レミリア「最悪よ。あのクソ作者のせいだね。」

フラン「ふーん。所でお姉様。股についてる棒みたいなものは何？」

レミリア「えっ!?!これは…えっーと…。」

フラン「どうしたの?お姉様?」

レミリア「いやその…。」(どうしよう…。フランになんてつたえたら…。)

ブラック「フランー!それはただの棒だ!気にしなくていいぞ!」

ブラックが遠くから助言してくれた。

フラン「ただの棒かー。じゃあ気にならないや。」

レミリア「ふう…。」(グッ!)

レミリアがブラックを見てグッドサインを出した。

ブラックもレミリアにグッドサインを出した。

そして少し時間が経ち…。

ブラック「そろそろあがるか。みんな!あがるぞ!」

南「気持ちよかったー。」

霊夢「魔理沙く卓球では負けないわよ?」

魔理沙「望むところだぜ!」

レミリア「私は朝も入ろうかしら。」

フラン「日が当たったら灰になるよ。」

レミリア「そのために河童が開発した。吸血鬼用のクリームを作ってもらったのよ。製作費2万円ときゆうり10本。」

咲夜「お嬢様……。また無駄遣いを……。」

レミリア「う……。。」

美鈴「私の給料が減るのはそう言うこと……。」（グサッ！）

咲夜「お嬢様のせいではありませんわ。」（ニッコリ）

美鈴「は、はい……。」（これこそ友情！）

小悪魔「あははは……。。」

フェイト「なあスピードお前何の牛乳飲む？」

スピード「私はコーヒー牛乳かな？フェイトくんは？」

フェイト「俺はもちろんいちご！」

スピード「お・こ・ちや・ま・だね〜。」

フェイト「うるせえ。仮面野郎。」

こーりん「まあまあ二人とも。仲良くね？」

ブラック「あれ？大神は？」

スピード「そう言えば居ないねえ。」

ブラック「月夜ー！大神は？」

月夜（ギクツ！）「まだ入ってるそうよ？」（汗）

ブラック「そうか…。悪いみんな先あがってってくれ。大神というわ。」

スピード「わかったよ。じゃあ大神のことをよろしく。」

………

ヤンデレ「ふう…。さて、大神は、どこかしら？」

あたりを見ると大神が岩陰に隠れて居て見えなかったが

白い尻尾がチラチラ見えていた。

ヤンデレ「大神？おーい！大神ー！」

私と呼んでも返事がないので近寄って見ると大神が息をきらししているのだ。

ヤンデレ「ちよつと大神？大丈夫？」

私が生をかけると私に飛びかかって来た。

ヤンデレ「キヤア！ちよつと何して…。」

私が立ち上がろうとすると大神が私の手首を床におさえる。

大神「はあ…はあ…。ヤンデレ・スカーレット…。」

ヤンデレ「…何よ。」

大神「お前が好きだ！大好きだ！」

ヤンデレ「……………はあ!？」

私は人生でこんなに驚いたのは初めてかもしれない。

大神「お前の事が好きなんだ。南よりも月夜よりもヤンデレだろがブラックだろがお前が大好きだ！」

ヤンデレ「ちよ…いきなり何言って…！」

私は理解が出来なかった。今まで男に「好き」なんて言われたことなどないからだ。

大神「はあはあ♡ヤンデレ♡好きだ♡」

大神が徐々にヤンデレ化してきている。

ヤンデレ（何…。怖い…。）

ヤンデレ・スカーレットは、今までヤンデレにあつたことがなくかなりの怖さだと

ん。）

ヤンデレ「大神、2人だけの秘密よ？」

大神「ああわかつてる。」

少しすると大神の体か戻っていた。

そしてそれぞれの部屋に戻った。

中編終わり

第6・5話 みんなで温泉旅行（後編）

風呂から大神と別れた後、ヤンデレと大神は自分の部屋に戻った。

ヤンデレ「／／／／／……。」

フラン「お姉様？どうしたの？顔赤いよ？」

ヤンデレ「なんでもないわ。少しのぼせただけよ。」

レミリア「なんでそんなに入ってたのよ。」

ヤンデレ「大神と話してたからね。」

く大神く

自販機前

大神「／／／／／／／／／。俺は…俺は…。」

大神は、ヤンデレ・スカーレットとのことで少しショックを受けていた。

大神「作者よ…ゆるさねえ！」（怒）

大神は、作者の部屋に向かった。

く作者く

作者「あいづらどうなったかな？」

作者は、温泉まんじゅうを食いながらゆっくりしていた。
シャキン！バラバラ…

作者「なんだ！ドアがいきなり壊れたぞ！」

大神「さ・く・し・や・？」

大神は、刀を持ちすごい怖い笑顔で作者に近づいてきた。

作者「大神？なんだよ…そんな怖い顔して。」

大神「お前のせいだ…。」

作者「はあ？」

大神「お前のせいで…私は！」

大神が俺に刀を振りかざしてきた。

作者「うおおお！危ねえ！」

俺は、間一髪で刀を避けた。

作者（何がなんだか分からない。アイツに頼むか…。）

俺は、パソコンに向かいパソコンを起動した。

大神「パソコンなんか起動している場合か？」

大神が刀で俺に切りかかって来るが俺はそれを華麗に避ける。

大神「何故？なぜ当たらない？まさか！」

ナツユキ「私です！V T u b e rのナツユキです！」
ナツユキとは

幻想郷に突如現れた謎のスーパー電波ガール。相手の設定、能力、スペルカード、ステータスなどを書き換えることが出来るチートな力を持つ。キズ○アイとか○口などと友達でありパソコンと現実世界を行き来する。わけあって俺のパソコンに住み着いている詳しい事は本編に話します。

大神「やつぱり。ナツユキなんで邪魔するの？」

ナツユキ「あなたが話もしないでご主人を切り殺そうとするからです。」

作者「サンキュー。ナツユキ。」

ナツユキ「はい！ご無事で何より！」

作者「じゃあ大神。何故、俺をいきなり襲って来たのか教えてくれ。」

大神「あの薬だ。飲んだ後に男になるのは、わかったけど副作用で…その…あの…。」

作者「どうした？」

ナツユキ「んーどうやらお風呂で自分が発情しスパア・ザ・グングニルをヤンデレ・スカーレットに入れたのちスターボウブレイクしたそうです。」

作者「なるほど。ってマジかよ…。よくアイツ断らなかつたな。」

大神「……………// // // // //。」

作者「取り敢えず元に戻すか。それしかない！ナツユキ手伝ってくれ。」

ナツユキ「了解です！」

大神「何を言ってるんだ？取り返しのつかない事をしたのに。」

作者「だからその事をなかつたことにするんだよ。」

ナツユキ「ご主人！今、ログインしております！」

作者「お！サンキュー。パソコンじゃ限界があるからな。パソコンじゃ出来ないことをナツユキするからな。」

！
そう。彼女もといナツユキは、パソコンに入りいろんな常識を引つ掻き回せるのです

大神「マジか！頼むぞ！できるだけ早く。」

作者「まあ焦るな。えっーと……。どうなってる？」

ナツユキ「この時点で状態は悪化してますね。ここをこうすれば……。」

大神「まあ任せるよ。」

（10分後）

作者「これでよし！」

大神「ん？出来たのか？」

作者「ああ。こんな感じだ。」

大神は、ヤンデレ・スカーレットに飛びかかった。しかしヤンデレ・スカーレットは、飛んでそれを避けた。大神は、その衝撃で身体が元に戻った。

作者「少し荒いがこれしか来ん。」

ナツユキ「私もこれが限界です。」

大神「まああれがなくなったならいいや。ありがとう！」

作者「いや、元は俺のせいだし。すまん。」

大神「いやいや。おかげで助かったよ。ありがとう。じゃあ！」

作者「……………おかしいな。」

ナツユキ「確かに…。」

作者「薬の副作用は、異性を好きになるだが心は、女の状態のはずなら襲わないはず…。」

ナツユキ「調べたんですが、どうやらお風呂で月夜さんが何かしらやったそうですね。」

作者「えーつと、ああそうゆうことか。」

作者は、悟った。月夜の愛が強すぎて大神が壊れてしまったそうだと。

作者「修復が必要だ。やるぞ！」

ナツユキ「はい！」

「霊夢達の部屋」

霊夢「あーあーあーあー。」

魔理沙「霊夢。うるさいぞ。卓球で負けたからって。」

美鈴「霊夢さんは昔から負けず嫌いでしたからね。」

魔理沙「霊夢。勝負で負けて牛乳奢るのそんなに嫌だったか？」

霊夢「仕方ないじゃない。負けるのが嫌なんだから。」

魔理沙「はいはい。そうですか。」

「スピード達」

スピード「へえー：それで咲夜さんと戦うと。」

フェイト「ああ。相手はナイフ使いだ。そして時間を止められる。勝つ事は不可能に近いが霊夢が勝ったんだ。俺も全力を尽くして戦う。」

スピード（フェイトは、1度だけ力を解放し聖剣レリクスカリバーを出した事があった。咲夜に勝つにはそれしか方法は、無いはずだ。それをわかった上で戦うのか？）

フェイト「どうした？ 黙りこくって。」

スピード「いやなんでもない。」

こーりん「大丈夫かな？」

フェイト「どうした？ 店の事か？」

こーりん「うん。ブラックの影を置いてきたのは、いいけどちゃんとしてるかなって。」

フェイト「大丈夫だ。アイツの影は、本体よりしつかりしてる（おい！）。だから大丈夫だ！」

こーりん「そうだね。あんまり気にしちやダメだね。」

フェイト「そうだ。少しは休むのも大事だ。」

く咲夜達く

パチュリー「うーん。」

咲夜「大丈夫ですか？パチュリー様。」

パチュリー「少し良くなっているわ。」

小悪魔「よかった。パチュリー様。この後は、宴会なのでそれまでおやすみください。」

パチュリー「うん。そうするわ。」

く南達く

南「大神が帰って来ないわね。」

月夜「まさか！誰かに狙われているとか？」（健全な意味で）

南「大丈夫よ。たとえ襲われたとしても刀には勝てないわ。」

月夜「そうね。宴会は、もうそろそろそろかしら？」

南「多分ね。カラクレさんに呼ばれると思うから。」

カラクレ「宴会の方が整いましたのでどうぞ。」

南「噂をすればとは、まさにこの事ね。」

〜宴会場〜

ワイワイガヤガヤワイワイガヤガヤ

ブラック「やめるよ。そんなに見るな。咲夜！写真を撮るな。恥ずかしい／＼／＼／＼

／。

フェイト「ブラック似合うなく。その服と言いまとめた髪といい。」

咲夜「お嬢様♡可愛いです！」（鼻血）

レミリア「お姉様。恥ずかしいのね？フッフ♡」

ブラックは、髪をまとめメイド服にネコミミを付けている。何故こんな事になったの

か？

時間は、少し戻る。

宴会が始まる時ブラックが乾杯をやると言われていて、

ナツユキが「それにふさわしい服書いてあげる！」と言われ描いた結果こうなった。

ブラック「ナツユキ戻せ〜！」

ナツユキ「いいじゃないですか！ご主人もそう思いますよね？」

作者「ああ。ブラック席に座れ。飯無くなるよ。」

ブラック「少しでも作者に期待した俺が馬鹿だった。」

フラン「それでね〜お姉様がね〜。」

魔理沙「フラン。その話は3回目だぜ。」

こーりん「わあ！危ない！誰か〜月夜さんを止めて！」

月夜「あはははは！私が最強よー！」

月夜は、ブラックの持ってきたワインを飲んでよってしまっている。そして南に倒れてきた。

南「きやあああ！」

.....

大神「南！大丈夫か？」

南夜「私が南夜！ただいま見参！」

なんと南と月夜が合体してしまった！刀が7本に増え髪が黒から青っぽい色にグラデーションされている。

南夜「さあ暴れるわよ！」

ヤンデレ・作者「止めなければ！」

作者は、ナイフを南夜に突きつけヤンデレ・スカーレットは、スピア・ザ・グングニルを突きつけた。

ヤンデレ・作者「暴れるな！力が抑えきれなくなる。」

その場が静まり返った。作者の鋭い目つきとヤンデレ・スカーレットの赤い目に二人は、合体がとけた。

作者・ヤンデレ「さあ飯を再開しよう！騒ぐのはいいが暴れるのもほどほどにな？」

一同「ひゃい！」

皆は、思った。作者とヤンデレ・スカーレットは、怒らせては行けないと。

そして時間が経ち：

ブラック「はあー美味かった。」

霊夢「これで1ヶ月いや3ヶ月は、生きられるわ。」

フェイト「マジかよ！」

作者「さあ飯もくった！風呂も入った！後は何をする？……そう寝るだけだ！」

レミリア「確かに疲れたわ。ふわあ……」

フラン「そっか……。寝ようか。」

ブラック「じゃあ。皆、明日な。」

一同「おやすみ。」

そしてそれぞれ自分の部屋に向かい寝た。

真夜中

ヤンデレ「作者？本当に幽霊は、でるの？」

作者「ああ。今日は、月が満月必ずでる！」

すると突如何もない所から黒いもやがでてきた。

???「久しぶりだね。作者……」

作者「ああ、久しぶりだな。ハクア。」

ヤンデレ「あなたは誰なの？」

ハルカ「僕は、ハルカ2年前命を落とすここに住んでいる、作者の友達さ。」

ヤンデレ「私は、ヤンデレ・スカーレットよ。よろしく。」

ハルカ「うん。よろしく、お嬢様。」

ヤンデレ「お嬢様だなんて／＼／＼／＼／＼。」

ヤンデレ・スカーレットは、恥ずかしがっている。

作者（この可愛い男に言われて嬉しいとはヤンデレも可愛いところあるじゃねえか。）

ハルカ「で、何しに来たの？」

作者「まあ軽く温泉旅行だ。俺は、お前に逢いに来た。」

そして連れ戻しに来た。」

ハクア「どうして？ 何故、僕を戻そうとするの？」

作者「元の世界に戻る気はないのか？ ここにいても意味が無いだろ？」

ハクア「戻る気は、無い。あの世界とこの世界では随分違うからね。僕には、この世界があつているんだ！」

ハクアは、別世界の研究所にいたがある日を境に消え探した所、別世界で亡くなった事を知った。ヤンデレ・スカーレットが知らないのは、ずっと地下に閉じ込められていたから。

作者「わかった。最後に一言だけ言うぜ。今からお前を別世界におくる。強制的にな
！」

ハクア・ヤンデレ「！」

ヤンデレ「あなた、まさか「力」を使うの？」

ヤンデレが「力」と言っているのは魔法のことである。

ハクア「やめて！ 嫌だ嫌だ！」

作者「はあ……。強制転移魔法！」

ハクアは、消えてしまった。

作者「うっ！ がは！」

作者は、口から血を吐いてしまった。強制魔法は、ある程度の体制がないと傷または

血を吐く事があるのだ。

ヤンデレ「ちよつと！大丈夫？」

作者「大丈夫だ。少し力を使いすぎただけだ。はあ…はあ…。」

そう言つて作者は、壁に寄りかかった。

ヤンデレ「ねえ。なんで別世界ハクアを送つたの？」

作者「ハクアは、どこかで造られた生命体なんだ。そのせいで幻想郷が崩壊しかけそうだったんだ。」

ヤンデレ「造られた生命体？幻想郷の崩壊？」

作者「ああ。ハクアは、何者かによつて造られた生命体。そいつはかなりの力を持つていたのである研究所でハクアは、拘束されていた。」

作者「ハクアは、俺がつけた名前だ。本当の名は「生命体—125」らしい。その研究所で原因不明爆発がおきてハクアは、逃げた。その後、幻想郷に来た。そして破壊者並の力を使い幻想郷を壊そうとした。霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜、妖夢、その他にも幻想郷の者達も協力してハクアは、死んだ。その後ハクアは、幽霊となり行方不明となった。そしてここにいるのを俺が見つけた。」

ヤンデレ「そんな事があつたのね。どこの世界に送つたの？」

作者「何も無い世界さ。あいつは幽霊だが破壊活動は、出来る。それはまたこの世界

を壊しかねない。だから何も無い世界なら大丈夫だ。まあ二度とその世界から出れないけどな。」

ヤンデレ「まあ仕方ないわね。ハクアは、何も無い世界で理想の世界を作ればいいわ。さあ寝ましょう。」

作者「ん？ああ。おやすみ。」

ヤンデレ「じゃあね。おやすみ。」

作者「ぐつ！ナツユキ…。包帯と薬を頼む。」

ナツユキ「は、はい！」

次の日

早朝

ヤンデレ「ふう。やつぱり温泉は、いいわね。」

レミリア「そうね。クリームも塗ったから大丈夫だし。」

パチュリー「私も初めて入ったけどとても温泉が柔らかいわ。」

三人はみんながまだ寝てる時に温泉に入りに来た。

パチュリー「レミイ、ヤン。」

レミリア・ヤンデレ「何？パチュリー。」

パチュリー「また、皆で来たいわね。」

レミリア・ヤンデレ「そうね。」

「朝ごはん」

カラクレ「今回は、咲夜さんも協力して作ったの朝食です。」

一同「おお！」

テーブルにはスクランブルエッグ、目玉焼き、白米、ハム、味噌汁などThe朝ごはんが色々と並べられていた。

それぞれが席に着いた。しかし大神が作者がいないことに気がついた。

大神「あれ？作者と南は？」

ヤンデレ「あら？そう言えはいないわね。」

ナツユキ「作者なら部屋で寝ております。南さんがお腹は、空いていないので代わりに看病しています。」

大神「ええ!?南が？」

「作者の部屋」

作者「ううっ…。まだ治ってはいないか。」

作者は、吐血した後傷を何個か負っている。

南「すごい傷の跡ね。何をしたらこうなるのか？」

作者「少し魔法を使っってな。少し怪我しちゃって…。」

南「まだ動いちやダメよ。傷が浅いんだから。」

作者「ありがとな南／＼／＼／＼／＼。（可愛いな。）

く食堂く

咲夜「看病って何したのよ。」

ナツユキ「怪我してしまったそうぞ。」

咲夜「ふーん。」

フェイト「あいつもバカだな。H A H A H A！」

スパーード「そうだねく笑。」

く作者の部屋く

作者（イライラ）

南「どうしたの？」

作者「誰かに馬鹿にされてる気がして。」

く食堂く

ナツユキ「皆様をご飯は食べ終わりましたか？では、自室に戻り荷物をまとめてください。」

一同「はい。」

く大神達く

大神「南のもやつとくか。よいしょ。」

月夜「私のも手伝つて。」

月夜が大神かぶさつてきた。

大神「わかつたからくつつくな。」

月夜「えへへーやだー。」

→スピード達→

スピード「あれ？僕のスペアの仮面がないぞ？」

フェイト「これのことかな？」（ニヤニヤ）

スピード「あつ…悪いことはいわない、返してくれないか？」

フェイト「やだよ。この仮面、かぶると何かあると風呂のときから気になってたんだよな。」

スピード「まで！かぶるな！」

スピードが止めたがフェイトは、スピードの言ったことも聞かずにかぶった。

フェイト「……………。うつ……………がああああああ！」

フェイトがいきなり叫んだ。そして暴走し始めた。

こーりん「スピードくん！これは!？」

スピード「説明しているひまは、ない。とにかくみんなに…！」

スピードがフェイトにカードを投げた。

フェイト「うっ!?!ぐぐぐっ…!」

スピードがなげたカードはSTOPカード。投げた相手の動きを一時的に止めることが出来る。

〜10分後〜

作者「何してんだか…。」（呆れ）

ヤンデレ「ほんとね。」

毎度の展開で2人は呆れている。

スピード「とにかくあの仮面を壊せばいい。だがあの姿だと壊すのは難しい。」

ヤンデレ「私ならできるわ。フェイトを止めること。」

大神「俺もやろう…。」

霊夢「魔理沙。一応、私達も戦うわ。」

魔理沙「ああ。付き合うぜ!」

スピード「そろそろ効果が切れる。3、2、1。」

フェイトが暴走しレミアに攻撃をしてきた。

ヤンデレ「神槍「スピア・ザ・グングニル」!」

ヤンデレ・スカーレットがグングニルでフェイトの攻撃を止めた。フェイトは、一旦

下がりケータイを取り出した。そして大神に切りかかってきた。

大神「くっ！あの時より強い！」

フェイトがケータイ（剣モード）から銃モードに変え大神の腹の部分を撃った。しかし弾は、弾かれた。

大神「危ない！腹にシールド（魔法）がなかったら死んでた。

フェイト「ぐぐぐ！がああああああ！」

フェイトが叫ぶと周りから真っ黒い人型が数体出てきた。

スペード「なんだと！影まで操れるのか!？」

ヤンデレ「!」

大神「影が実態化した!？」

フェイトは、ヤンデレ・スカーレットと同じ能力を使った。そして黒い影が襲ってきた。

ヤンデレ「禁弾「スターボウブレイク」！」

霊夢「霊符「夢想封印」！」

ヤンデレ・スカーレットと霊夢が攻撃したがすぐに影が元どおりになった。

霊夢「何よ！こいつら全く攻撃がきかないじゃない！」

ナツユキ「攻撃は影には一切きかないようです！本体をどうにかしないと。」

??? 「こうなると思ってたよ。」

ヤンデレ 「えっ？何でいるの！」

作者 「どうゆう事だ？ハクア！」

ハクア 「説明は、後。こいつを倒せばいいんでしょ？」

作者 「ああ。だが奴は、攻撃が強く、動きが早い。」

ハクア 「なるほど。ヤンデレだっけ？あいつの服に向かって槍投げれるか？後は、この巫女さん除霊の札の用意を。魔法使いは、マスタースパークの準備を。」

ヤンデレ 「一応やってみるわ。」

霊夢 「わかった。」

魔理沙 「わかったぜ！」

ヤンデレは、槍を思いつきり投げフェイトの袖に突き抜け壁に刺さった。霊夢がその間に札を貼った。フェイトが苦しんでいる。

フェイト 「うううう…：がああ…。」

ハクア 「魔理沙、今だ！」

魔理沙 「いくぜ！マスタースパーク！」

マスタースパークは、フェイトに直撃した。

しかし仮面は、まだ取れていない。

ハクア「破壊「12の力」

ハクアの破壊の力でフェイトの仮面は、割れた。

作者「やつとか。」

フェイト「俺は、一体？」

スピード「君は本当に馬鹿だな。」

フェイト「へ？へ？」

ヤンデレ「まあいいじゃない。一件落着つてことで。」

作者「じゃあみんな宿の外で待ってくれ。」

………

作者「んでハクア？何故いるんだ？」

ハクア「転移される前にお前の体にはんの少しの俺の力を取り入れたんだ。だから俺

は、完全体ではないけど1部分のハクアってわけ。」

作者「気づかなかったな。」

ハクア「でもやつぱり体持たない。そろそろあの世界に帰るよ。じゃあね。作者。」

作者「……ハクア、じゃあな。」

ハクアは、消えてしまった。

俺は開かずの間に行き復活の魔法をそつとかけた。

ヤンデレ「遅いわよ！」

作者「すまない。」

ヤンデレ「でハクアは？」（小声）

作者「消滅した…。力を使いすぎたようだ。」

ヤンデレ「そう。まああの世界でもやって行けるわよね。」

作者「……………ああそうだな。」

作者は、嘘をついた。ハクアを傷つけないために。

カラクレ「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております。」

ヤンデレ「ええ楽しかったわ。またいつか会いましょう。」

大神「久々に羽を伸ばせたよ。」

作者「ああそうだな。」（羽なんかねえけどな）

フェイト「すまねえ。部屋汚しちゃって。」

スパード「大丈夫だ。カードで直しておいたから。」

フェイト「なんでもありだな！」

作者「じゃあそろそろ帰るか。またな…カラクレ。」

そう言つて皆、幻想郷に帰った。

本編

第7話 紅魔館とヤンデレの記憶

　　次の日

　　香霖堂

ブラック「んゝゝ。よく寝た。」

ブラックは、目が覚めた。

ブラックは、起き洗面台に行き顔を洗い鏡を見た。

（この顔も見慣れたな。）

そう思い。こーりんがいる方に行く。

ブラック「おはよう。こーりん。」

こーりん「おはよう。ブラックくん。よく眠れたかい？」

ブラック「ああ。おかげでよく寝れたよ。」

こーりん「そうか。じゃあこれ。」

こーりんは、俺に本をくれた。

ブラック「これは？」

こーりん「面白い小説さ。君にあげるよ。」

ブラック「いいのか？」

こーりん「うん。僕は読み終わったし僕の店を手伝ってくれたからね。」

ブラック「ああ。ありがとう。じゃあ俺は帰ろうかな？」

そう言うのと店に客が入って来た。魔理沙だった。

魔理沙「よう。こーりん。あれ？ブラックもいたのか？」

こーりん「ああ。おはよう魔理沙。ブラックくんは、ここで働いてたんだよ。」

魔理沙「そうなのか。こーりんパソコンだっけ？ちよつと見せてくれないか？」

こーりん「ああ。ちよつと待ってね。」

こーりんは、店の奥に行った。

ブラック「なあ。魔理沙。」

魔理沙「何だぜ？ブラック。」

ブラック「お前：好きな人いるか？」

魔理沙「突然な何をいい出すんだぜ!？」

魔理沙は、慌てていた。

ブラック「いや別に：。聞いてみただけだ。」

魔理沙「まあ。好きなやつは、いることにはいるぜ。」

ブラック（！）「誰だ？」

魔理沙「霊夢だ。私のパートナーであり良き親友だぜ。」

ブラック「そうか。パートナーか。」

こーりん「はい！魔理沙持って来たよ。」

魔理沙「おお。ありがとう。あつそうだブラック。紅魔館に行かないか？」

ブラック「え？何故？」

魔理沙「いやーパチュリーに本を返しに行こうと思つて。」

ブラックは、少し考え魔理沙に「行く。」と返事をした。

く紅魔館く

魔理沙「さあ紅魔館に着いたぜ！」

ブラック（やはり変わらないな。外見も中も）

魔理沙「どうしたんだよ。ブラック？」

ブラック「いや、でかい建物だなくって。」

それもそのはず元々、自分と紅魔館のメンバーが住んでいた場所だから当然でかい場所なのだ。

魔理沙「まあ中に入ろうぜ。」

ブラックと魔理沙は、紅魔館の中に入った。

く大図書館く

魔理沙「パチュリー本を返しに来たぜ！」

パチュリー「珍しいわね。魔理沙が返しに来るなんて。」

魔理沙「まあたまには返さないといけないからな。」

ブラック「何処にあつたけなく。あの本。」

ブラックは、本棚の隙間で好きな本を探していた。

次の瞬間ナイフが刺さった。オマケに銃弾にも当たった。

ブラック「今の攻撃は、咲夜だな？もう1人は桜だろ？」

俺は、1回コンテニューしてしまった。

咲夜「あら？ブラックだったの？」

桜「ごめんなさい。侵入者かと思ったよ。」

このメイドは十六夜。桜。咲夜の妹で咲夜と違い銃使いなのだ。

ブラック「侵入者じゃねえよ。魔理沙と一緒に来ただけだ。すまないが紅魔館内を自

由に見せてもらってもいいか？」

咲夜「ええ？ああ構わないわよ？」

ブラック「ありがとう。」

俺は、大図書館から出てすぐにレミリアの部屋に向かった。

咲夜「珍しい子ね？紅魔館みたいだななんて。」

ブラック「ここだな。レミリアの部屋。」

俺は、そつとドアを開けた。

ブラック「レミリアの部屋は、あまり変わらないな。」

部屋には、ベッドやタンス、椅子と机があるくらいだった。

ブラック「机に何かあるな。」

ブラックが机の方に行くとノートがあつた。ブラックがノートを取り開いてみた。

：お姉様。早く帰ってきてほしい。私が悪かつたから。もう幻想郷を支配するとか言わないから。帰ってきて欲しい…。

ブラック「…レミリア・スカーレット。ヤンデレ・スカーレットは、おそらく戻らないと思う。すまない。」

ブラックは、分かつてはいた。いつかは戻らないと行けないと…。

レミリア「あら？ブラックじゃない！」

ブラック「うお！つてレミリアか。びっくりした。」

レミリア「なんで私の部屋にいるの？」

ブラック「魔理沙と一緒に来たんだ。それで暇だからこの部屋に来たんだ。」

レミリア「もしかして…ブラック私に気があるの？」

ブラック「いやいや別にそんなじゃないよ。」

レミリア「そう……」（何か悲しいな。って私、何を考えてるのよ！）

ブラック「どうした？レミリア。」

俺が顔を覗き込むと

レミリア「ななななんでもないわよ！えつと好きなように紅魔館を見るといいわ。じゃあね！」

レミリアは、顔を赤らめて部屋を出ていった。

ブラック「なんだアイツ？まあここには用事がないから他のところに行こ……」

ドカーン！（爆発音）

突如、大図書館の方で大きな音がした。

ブラック「今の爆発は図書館な方……。魔理沙！」

俺は、即座に大図書館に向かった。

バタン！（ドアを激しく開ける音）

ブラック「魔理沙！大丈夫か？」

魔理沙「フランく。ここで弾幕打ちちゃダメだぜ。」

フラン「えー。魔理沙遊んでくれないんだもん。」

魔理沙「でもなく。あつブラック！どうした？」

ブラック「いや…無事ならいいんだ…」

フラン…魔理沙に何してんだよ。

フラン「ブラックく！あそぼー。」

ブラック「なんでだよ。後、危ねえからレーヴァテインしまえ。」

フラン「うゝ。わかった。」

ブラック「フラン、遊びたい気持ちは分かる。けどここでやると死ぬやつもいる。だから…その…：…：…：地下に戻ってくれないか？」

フラン「？ブラック。なんで私が地下にいること知ってるの？」

ブラック「ええ！ああそれはだな。（焦り）」

（やべえ！迂闊に口に出た。どうしよう。）

チラツと俺はパチュリーの方を見た。

パチュリー「フラン。私が教えたの。だからブラックは、知っているのよ。」

フラン「なんだく。パチュリーが教えたのか。じゃあね。ブラック。」

と言つてフランは、地下に戻つて行つた。

魔理沙「そろそろ帰るよ。パチュリー。またな。」

パチュリー「ええ。またね。あつブラックちよつといい？」

ブラック「えつ？ああ。魔理沙先に行つてくれ。」

魔理沙「おう。わかった。」

魔理沙は、大図書館を出た。

ブラック「で、なんだパチュリー?」

パチュリー「…久しぶりね。ヤン?」

ブラック「…きずいてたのか。」

パチュリー「貴方は、いままで何をしていたか知らないけど紅魔館に戻らないの? レミイもフランも皆悲しい気持ちよ?」

ヤンデレ「悪いが私は戻る気は無いわ。紅魔館の当主は、レミアアの者。そして今の生活の方が私は楽よ。ごめんなさい。パチュリー。」

パチュリー「そう。まあ仕方ないわ。でも帰って来たかったらいつでも帰って来てね。」

ヤンデレ「……………ええ。」

ヤンデレは、帰る気は、全くない。パチュリーに嘘をついてしまった。

く魔法の森く

魔理沙「ブラック。今日は、付き合ってくれてありがとうな。またな。」

ブラック「ああ。またな。」

南「隙あり!」

ブラック「うお！ってなんだよ。南か。」

南「やあブラック。今、暇〜？」

ブラック「ああ。ちょうど暇になった所だ。」

南「じゃあさ。私とデートしよう？」

ブラック「ああ。いいよ……………。今なんて？」

南「デートしよう？って言ったの。」

ブラック「はあ？何を言ってるんだ!?」

南「何？別にいいじゃないデートくらい。」

ブラック「デートって好きな人同士がやることだぞ？」

南「うん。だから私…。ブラックの事好きなの。」

ブラック「oh…………。」

南「さあデートしよう？」

ブラック「わかったよ。」

〜少し時間が経ち〜

南「ん〜！気持ちいい。」

ブラック「ああ。そうだな。今日は、いい天気だ。」

南「そうね〜。ポカポカ陽気で気持ちいい。」

ブラック「ああ。本当に…痛っ…。」

南「大丈夫？ブラック！」

ブラック「大丈夫だ…。少し頭が痛むだけ…。」

その瞬間ブラックの頭に電撃が走った。

ブラック「うわあああ！痛い！」

南「ブラック?!しっかりして！」

ブラックは、気を失った。

??? ???

「○○○。悪いが父さんは、ある実験をしてるんだよ。」

「知ってる。大事な実験でしょ？」

「そう。だから〇〇〇を実験体しなくてはならない。協力してくれるかい？」

「うん！お父さんの実験を手伝う！」

「本当にいいんですか？自分の娘ですよ？記憶も無くなりますし。」

「大丈夫だ。この実験は、成功する。」

「お父さんこれでいい？」

「ああ。いいぞ。〇〇〇…じゃあ行くぞ！」

スイッチオン！

「きやあああ！痛い！」

「……………。娘よ。許してくれ。」

「きやあああああああ！」

「スイッチを切れ。」

スイッチオフ

「ついに完成した。究極の生命体が！」

「やりましたね。博士。」

「あなたは誰？」

「私はお前の父さんだ。そしてお前の名前はヤンデレ・スカーレットだ。よろしく

な。」

??? 「ええ。よろしく。」

これがヤンデレ・スカーレットが誕生のきっかけだ。

その後、父は実験したが失敗作のレミリアとフランを作り出した。父は、その日から研究に明け暮れる様になり朝から晩まで研究をしていた。家族は、それをただ見るだけしか出来なかった。その後、父は新たな生命体を作ろうとしていた。（幻想転生物語く暗闇く続く）

第8話レミリア恋!?!月夜との再開

く南の家く

ブラック「うううう。はっ！」

南「あっ！ブラック。大丈夫？」

ブラック「南……。俺は、いままで？」

南「森で急に頭を抱えて気を失ったのよ。」

ブラック「ここは？」

南「私の家よ。近くだったから運んだの。」

ブラック「ありがとう……。」

大神「礼なら俺に行ってほしいな。」

ブラック「あっ大神。どゆことだ？」

南「大神がここまで運んでくれたのよ。」

ブラック「そうか。ありがとうな。」

月夜「久しぶりだな。ブラック？」

ブラック「！お前は、俺を切った奴か。」

月夜「しかしお前は、殺したはずなのに何故生きている?」

ブラック「俺にはコンテニユーの能力があるから死にたくても死ねねんだ。」

月夜「という事は不死身か。いい刀の練習台になりそうだ。」

ブラック「やめてくれ。それに不死身じゃない。大神をコンテニユーさせたことによつて回数制限がかかった。残り80回コンテニユーできるがな。」

月夜「そうか。無限コンテニユーは、最初の内だけか。」

ブラック「ああ。そろそろ帰ろうかな。あまり長居してたら悪いし、俺は、帰らないと…痛つ…。」

また頭痛がおきた。一瞬だが未来が見えた気がする。あの姿は大神?

大神「まだ休んでいた方がいい。そんな状態じゃ帰れないだろ?」

ブラック「いや…はあ…帰れる…よ…はあはあ…。」

頭痛になりながらも帰らないと行けないと思う。

大神「…。わかった。月夜、途中まで送つてやれ。」

月夜「わかりました。ブラック、森まで送るよ。」

ブラック「すまないな…。うつ…。」

ブラックと月夜は南の家を出た。

大神「行つたか。南、偵察ご苦労。」

南「偵察つて隠れて見てたわけじゃないから偵察じゃなくない？」

大神「デートと言うのもどうかと思うがな。だが重要なのはそこじゃない。ブラックの事だ。南、何かわかったか？」

南「ブラックとヤンデレ？の関係の事でしょ？んく友達でも親友でもない。もしかしたら同一人物説かもしれない。」

大神「やつぱりか。月夜はブラックの正体は、知らなそうだし、かといって他に知っている人はいないし…。」

南「でもさ性別を変えられることなんてあるの？永琳にも聞いたけどそんな薬はないし人の構造上無理だって。」

大神「ここは、幻想郷。常識が通じない場所だ。性転換なんて普通の事だろ？」

南「そうだね。ここは、私達がいた世界じゃない。幻想郷だからね。」

大神「今後、ブラックをマークしよう。他の人にも頼んで。」

く魔法の森の入り口く

月夜「着いたよ。ブラック。」

ブラック「ありがとう。月夜。」

月夜「ブラック…いや、ヤンデレ。」

ヤンデレ「何？月夜。」

月夜「ごめんなさい。」

ヤンデレ「(?) なんの事?」

月夜「あの…殺してしまつて…。」

ヤンデレ「なんだそんな事ね。いいのよ。日常茶飯事だから。」

月夜「許してくれるの?」

ヤンデレ「別に構わないわ。さすがに練習台にするのは

やめて欲しいけど。」

月夜「ありがとう。」

月夜は、笑顔を見せてくれた。

ブラック「じゃあな!」

月夜「ええ。またね。」

く魔法の森道中く

ブラック「はっ…はっ…痛っ!」

ブラックは、息切れしながら頭痛がずっと続いていた。

ブラック「少し休まないと…。」

当たりを見渡すと洞窟があつた。

ブラック「…」。あそこで休むか…。」

洞窟に入ると水の音が聞こえる。洞窟の奥に行くと透明感のある水があった。

ブラック「はあ…。少し喉がかわいたな。水を飲むか。」

ブラックは、水を飲み一息ついた。

ブラック「はあ…。頭痛は、収まったか。しかし、何故あんなに頭が痛くなったのだろう。」

ブラックが色々と考えていると

???「あらくここに入り込むなんて珍しいお客さんね。」

と頭の上から声が聞こえた。

ブラック「誰だ！ってなんだこれ!?身動きが取れない。」

ブラックの体にはかなり強力な蜘蛛の糸が貼られていた。

アカリ「私はアカリ。蜘蛛女よ。それにしても美味しそうね。お兄さん？」

ブラック「蜘蛛女、この糸を剥がせよ！」

アカリ「あらく餌が何を言っているのかしら？」

ブラック「餌って俺を喰う気か？」

アカリ「そうよ。質問は、それだけ？じゃあ食べましようかね？」

蜘蛛女がブラックに近づいてくる。ブラックは、どうすることも出来ない。すると突

然、俺の糸が切れた。

ブラック「うわ…つと危ねえ。地面に叩きつ蹴られるとこだった。ありがたいな、月夜。」

俺はくるりと一回転し着地し、月夜に例を言った。

月夜「何か嫌な予感がしてね。でもそんな事を言ってる場合じゃなさそうね？」

アカリ「私の糸が簡単に切れただと…。鉄よりも硬いのに…一体何もの？」

月夜「私は月夜。闇に紛れて現れる狐よ。」

ブラック「俺は、ブラック。墮天使だ。」

アカリ「面白いふたりね。ブラック、あなたを食べるのはやめたわ。」

ブラック「そうか。じゃあ帰ろ…」

アカリ「だ・か・ら♡代わりにこの黒い狐を食べようかしら？」

アカリは、月夜を糸で縛り逆さまに吊るした。

月夜「くっ！刀に手が…。」

ブラック「お前。友達って知ってるか？」

ブラックが少し俯きながら言った。

アカリ「知ってるわよ。私にも昔友達がいたもの。」

ブラック「その友達を傷つけられたり取られたりしたらどうする？」

アカリ「今の私には関係ないわ。」

ブラック「……………それが「答え」か。」

ブラックは、顔を上げた。

ヤンデレ「神槍「スピア・ザ・グングニル」

アカリにグングニルが直撃しアカリが天井から落ちた。

ヤンデレ「はあく。今の私に友達は、いない。家族も…。けどブラックにはいるわ。

友達が。その友達を食べようとするならこの私が許さない！」

アカリ「何…その姿…。」

アカリは、気を失った。

ヤンデレ「大丈夫？月夜。あら？」

月夜は気を失っている。

ヤンデレ「仕方ないわね。魔理沙の家に泊まらせてもらいましょう。」

く次の日く

ブラック「んっ…朝か。おっ頭痛が治ってる。」

ブラックは、伸びをし顔を洗う。

ブラック「はく。さっぱりした。」

魔理沙「おはよう。ブラックく。」

魔理沙は寝起きのようだ。

ブラック「おはよう…って、まっ魔理沙!？」

魔理沙は、俺に寄りかかってきた。

魔理沙「んー? あっブラックくごめんく。」

魔理沙は、起きたばかりなのでよく見えないようだ。

ブラック「だっ大丈夫だ魔理沙!俺は、問題ない!」

魔理沙「そうかく。」

魔理沙は、顔を洗い出した。

ブラック「／／／／／／／／。魔理沙く。俺はやっぱり／／／／／。」

ブラックが顔を赤く染めている。

月夜「ん?ここは?」

ブラック「おはよう。月夜。ここは魔理沙の家だ。月夜は、気絶したんだよ。俺がこ

こまで運んだんだよ。」

月夜「あつ私、気絶したんだ…なんという不覚。すまないブラック。少し修行せねば

…。」

ブラック「まあ無事でよかった。」

く少し時間が過ぎく

ブラック「じゃあ色々ありがとう。魔理沙。」

月夜「すみません。一晚泊まらせてもらって。」

魔理沙「いいんだぜ！別に構わないぜ！」

魔理沙は、本当に器が大きい。

ブラック「じゃあ家に帰るとするか。」

月夜「またね。ブラック。」

魔理沙「私は紅魔館に行こうかな？」

ブラック（……紅魔館に行くのか……）

（紅魔館）

咲夜「パチュリー様。少しお聞きしたいことがあるのですが。」

パチュリー「何かしら？咲夜。」

咲夜「最近、お嬢様の様子が少し変なんですよ。たまに顔を赤くしたり、たまにブーツ

としてたり何か知っていますか？」

パチュリー「いいえ。特に知らないわ。もしかしたら赤くなる事ではレミイに好き

な人が出来たのかもしれないわね。」

咲夜「好きな人ですか……。失礼致します。」

咲夜は、図書館を出た。

パチュリー「咲夜？」

咲夜「お嬢様の部屋にもしかしたら…。」

咲夜「………………。あった。この髪の毛は、ブラックのかしら?でもこれじゃあ証拠が足りないわ。他にもなにか…。」

咲夜は、部屋を出てレミリアの場所に向かった。

咲夜「お嬢様。」

レミリア「何かしら?咲夜。」

咲夜「少しお聞きしたいことがあります。」

レミリア「(?)」

咲夜「ブラック…の事なのですが。」

レミリア「えっ!?!」

レミリアは、動揺している。

咲夜(あの反応。やはり…。)

咲夜「単刀直入に聞きます。お嬢様は、ブラックの事が恋関係で好きなのですか?本

当の気持ちをおきかせ下さい。」

レミリア「………………。ええ。好きよ。ブラックの事が／／／／／。」

レミリアは、顔を赤らめながらもゆっくりと答えた。

咲夜「そうですか。本当の気持ちなのですね。」

レミリア「咲夜…わかつているわ。吸血鬼より先に人は死ぬ。ブラックは、墮天使しかし私より先に死ぬ。」

咲夜「お嬢様…。」

くその頃ブラックはく

ブラック「へくしゅ！うく誰か俺を噂してんのかな？」

第9話 スーパー?電脳姉妹!

ブラックは、考えていた。魔理沙の事だ。

ブラック「なんで俺は魔理沙に会うと胸が苦しいんだろう。」

それは考えなくても分かる「恋」だ。しかしヤンデレもといブラックは、恋をした事がない。もちろん付き合った事もない。

ブラック「ああ魔理沙。俺は、お前の事がs…」

ドカーン!バチバチバチ!

突然、俺の頭の方から爆音と電気らしき音がした。

ブラック「なんだ!?何事だ?」

ブラックが家から降りるとルーミアがいた。

ブラック「ルーミア?何があつた?」

ルーミア「……………だー。」

ブラック「は?なんて言つた?」

ルーミア「そ……………のだー。」

ブラック「ルーミア?」

ルーミア「そうじゃないのー！」

ルーミアは、いつもの様子と違う。ルーミアの「そうなのか」ではなく逆の言葉を言っている。

ブラック「どうなってんだ？…あれは…。」

遠くに南がいた。しかし一瞬で姿が消えた。

ブラック「あれ？どこいった？」

すると後ろから…

南「あなたは、誰ですか？」

南が俺の首元に刀を出していた。

ブラック「あく南？これはなんの遊びかな？」

南「貴様は、やつの仲間か？」

ブラック「は？なんの話？」

南「答えろ！」

南は更に刀を近づけた。

ブラック（キヤータステター）

月夜「み・な・みく♪」

南「なっ！月夜、何をする？」

月夜は南に抱きついている。

月夜「だって私は南の事が好きだから。愛情表現してるんだよ。」

ブラックは、思った。

うん：「百合」だ。

南「今はそんな場合じゃ：つてどこいった!」

ブラックは、逃げた。

ブラック「ここまで来れば大丈夫だろ。」

ガサガサ!

ブラック「誰だ! 新手か? 南か?」

スペード「やあブラック。こんなところで奇遇だね?」

ブラック「なんだ：スペードか。脅かすなよ：つておーい! お前!」

スペード「なんだい?」

ブラック「なんで全裸なの? いつものマジシャン衣装は?」

スペード「? 何言ってるんだい? いつも通りじゃないか。」

スペードは、全裸だ。男のシンボルも見えている。だけど仮面は外さない。

ブラック「とりあえず俺の上着を着ろ!」

スペードは、ブラックの上着を着た。

スペード「まあまあ着心地がいい服だね。」

ブラック「そうか…。」(苦笑い)

南「見つけたぞ！貴様！」

月夜「待つてよ〜南♡」

ルーミア「そうじゃないのだー！」

一斉にブラックの方に南、月夜、ルーミアが来た。

スペード「やばいな。帰ろう…。」

スペードは、カードを残し消えた。

ブラック「やばっ！」(どうする!?)

???「こっちだ！ブラック！」

ブラックは、木の上に引っ張られた。

ブラック「ふ〜助かった。ありがとうな。フェイト。」

フェイト「いや別にたまたま通りかかってからな。」

ブラック「なあみんなおかしくないか？ルーミアは、逆の言葉が使うし南は、俺のこ

と知らないし月夜は、大神ではなく南を好きになるしスペードは、露出魔だし。」

フェイト「ああみんなおかしいな。なんでこんなことになったんだろうか？」

ブラック「お前は、変わってないな。どうしてだ？」

フエイト「未来に少し帰ってたんだけ。俺は、時空の旅をしてるから過去、現在、未来にも行ける。他にも異世界やこの幻想郷にも来れる。」

ブラック「なるほど。いないから影響を受けなかったと。」

フエイト「できれば過去に帰ってこの異変の犯人を調べたいのだが、過去に行く通路が何者かによって封鎖されている。」

ブラック「じゃあこの異変は、今解決しなければならぬんだな?」

フエイト「ああ。未来だとみんなが死んでいる。しかし魔理沙って女とお前のもう一個の姿がいた。しかし不思議だ。魔理沙は、何故影響を受けないのか?」

ブラック「それは分からない。でも今を変えれば最悪未来は、変わるんだよな?」

フエイト「ああ異変の犯人を探そうぜ。俺は、バイクで走りながら探す。」

ブラック「じゃあ俺は空から見てみる。」

フエイト「ああ頼んだぞ!」

ブラックとフエイトは、それぞれ別れて探すことに。

く魔法の森上空く

ブラック「うわあ…酷い有様だ。人や妖怪がおかしくなっている。」

チルノは頭が良くなり何かしら色んな言葉を言っている。ミステリアは、ヤツメウナギじゃなくラーメン屋をやっている(屋台で)。

ブラック「早く探さないと……！」

く妖怪の山く

ブロロロロロ！（バイクの音）

フェイト「いねえな。にしても山は、妖怪で溢れかえってるな。」

フェイトは、その間をバイクで走り抜けながらそんな事を思っていた。

ロードバード「ハクレイジンジャニハンノウアリ！」

フェイト「おっそうか。じゃあ行くぞ！」

ロードバード「フライモード！」

フェイトは、博麗神社に向かった。

く博麗神社近くの上空く

ブラック「はあく博麗神社まで来ちゃった。」

ブラックが下を見ると見知らぬ女が立っていた。

ブラック「誰だ？聞いてみるか。」

ブラックが博麗神社の前に降りた。

ブラック「おい。お前そこで何してるんだ？」

???「何してるのって博麗霊夢ってやつを倒したんだけど？」

よく見るとその女の足元には、横たわっている霊夢の姿が！

ブラック「お前：何者だ？」

ナツユキ「私はナツユキ。バーチャルの世界から来たキャラクターでくす！」

人を殺したとは思えないテンションで丁寧にかつふざけた感じで挨拶をしてきた。

ナツユキ「それにしてもここの住民は、面白いね。私が設定をいじっただけであんなにも変わるんだね。」

ブラック「設定を変える？何を言ってるんだ？」

ナツユキ「そのままの意味だよ？例えばあなたが私の事を嫌いだとする。その時、私があなたの設定を変えればあなたは、私の事が好きになる。簡単に言うとな性別や能力、この世界の住民のプロフィールなど変えることが出来るって感じかな？」

ブラック「みんながおかしいのはお前のせいかな。」

ナツユキ「おかしい？面白くしただけよ。あなたは、この面白さが分からないの？」

ブラック「分からねえな。それよりこの状態を早く戻せよ。」

ナツユキ「嫌よ。面白い物はもっと面白気しなきや！」

ブラック「言っても分からないなら。力づくでやめさせてやるよ。」

ナツユキ「へえー面白い…。やれるもんならやってみなさい！」

ナツユキは、電子パネルを展開した。

ブラック「電子パネルか…。あれで設定を変えてる感じか。」

ナツユキ「イラスト！」

ナツユキは、白いパネルに何か書いている。

ブラック「とりあえずナイフを……」

ナイフを取り出そうとしたがナイフがない。

ブラック「あれ？ナイフは!？」

ナツユキ「危ないので破壊させてもらいました。よし！完成！」

ナツユキは、書いた絵を復元させた。

ナツユキ「銃を復元させたよ。よし！君には消えてもらおう。」

ナツユキ銃を打ってきた。

ブラック「やばっ！」

ブラックは、高く飛んだ。

フェイト「ブラック！あいつは？」

ブラック「設定を書き換えたり物を復元、破壊が出来るやつらしい。」

フェイト「あいつが異変の首謀者か。それなら……」

フェイトは、携帯型の銃を取り出した。

フェイト「喰らえ！」

フェイトは、ナツユキに目掛けて銃を乱射した。

ナツユキ「わっ! あぶないな。設定を書き換えよう!

えっと…これか! こうして…」

フェイト「え? 俺の銃は? ロードバードもいねえ!」

ブラック「あいつ消したな。でももしかしどうしたもんか。武器もないんじや戦えない。」

フェイト「お前さ…スペルカードあつたよな? あいつにやってみてくんねえか?」

ブラック「無駄だと思うけどやってみるか。」

ブラック「幻想「アンダーワールド」!」

ブラックの後ろから黒い世界が出てきた。そして無数の弾幕がナツユキ目掛けて飛んでいく。

ナツユキ「消してやる! ……あれ? 消せない! うわあ! 痛ア! なんて?」

ブラック「あれ? 攻撃が当たる。なんで?」

フェイト「やっぱりか。お前さ、本当の姿はあの吸血鬼だろ? 多分だけどその姿だとかいつのデータにお前は、居ないんじやないか? 作られた存在だから。ナイフは、元々スペードのだし物体だから消せるけど。」

ブラック「作られた存在…。という事はこの姿なら戦えるって事か! よし! それなら。」

ブラックは、ナツユキ向かい新たなスペルカードを出した。
ブラック「漆黑「墮天の狂想曲」」

辺りには黒い羽が飛び交いナツユキに向け一斉に飛んできた。
ナツユキ「痛っ！ううもうなんできかないの！」

ナツユキは、必死に俺に設定を変えようとするが全くもって意味が無い。

フェイト「俺も何かできれば…あつそうだ！」

フェイトは、ナツユキに狙いを定めて…

フェイト「足に力をためて…よし！いくぞ！」

足が光だしフェイトは、ナツユキに向けて蹴りを出した。

フェイト「うおらああああああ！」

ナツユキ「え!?きやあ!油断した…。もういい…この世界を破壊してやるく!」(泣)

ナツユキは、思い通りに行かず泣きながら恐ろしい事をいい出した。

フェイト「えっ…はあ!やめろって！」

??&霊夢「やめなさい！」

ナツユキ「痛っ!誰よ!私の頭叩いたの!っっておねちゃん!?と博麗霊夢!?!え?なんで
?どうして?」

ナツユキは、突然の事で頭の整理が追いついていない。

??? 「もうあなたは、いつもこうなんだから。」

ナツユキ 「だって〜:。」

ブラック 「すまないがあなたは？」

ハルアキ 「ご迷惑かけて申し訳ありません。私はハルアキ。ナツユキの姉です。よろしくお願います。」

ブラック 「こちらこそよろしく！」

ナツユキ 「ねえなんで博麗霊夢は、生きてるの？」

ブラック 「あくそれはだな。俺が生き返らせた。」

ナツユキ 「え?それはどうゆう？」

ブラック 「俺の能力は、人にも反映出来て簡単ゆうとコンテニューさせたって事だ。」

ナツユキ 「あなた:色々と凄いのね。」

ブラック 「まあな。そういやなんであんたら姉妹は、ここに？」

ハルアキ 「実は、私の世界が終わりを向かいそうになっていてその為どこかの世界に移住しなければならぬのです。」

霊夢 「じゃあここに住めばいいじゃない。」

ハルアキ 「できればそうしたいのですが、私たちはパソコンの世界から来たので現実の世界にはあまり居られないんです。もしここにいたら消える場合もあるので。」

フェイト「なら…俺のケータイは？」

ハルアキ「あまり他人に迷惑は、掛けたくありません。」
するとブラックの後ろにスキマが。

ブラック「ん？紫か？何？」

紫「このパソコンに入ればいいんじゃない？」

ハルアキ「ですから人に迷惑は…。」

紫「大丈夫よ。この持ち主は怒らないから。」

ハルアキ「はあ…ではお言葉に甘えて。ナツユキ行くわよ。」

ナツユキ「うん。じゃーねー！みんなー！」

ハルアキ「あつ、この世界は元に戻しておきますので。では…。」

ブラック「おう。じゃあな。」

フェイト「行つたか。これで時間もみんなも元に戻るだろ。」

霊夢「騒がしい連中だったわね。また来るかしら？」

ブラック（……………。）

フェイト「ブラック？どうした？」

ブラック「ん？あつ…いやなんでもない。」

ブラックは、あの未来の事が気になっていた。魔理沙と自分だけがいる未来を…

霊夢「もう夕方ね。2人とも今日は、泊まっていいわよ。」

フェイト「おお助かる。サンキュー。」

ブラック「俺は、いいや。家、近いし。」

霊夢「あらそう……。じゃあ気をつけてね?」

ブラック「ああ。じゃあな。」

フェイト「おう!じゃあな。」

霊夢&フェイト「……………ふう。」

霊夢「ねえフェイト?ひとつ気になることがあるのだけれど。」

フェイト「俺もだ。」(まあ知ってるがな。)

霊夢「ブラックって……………」

フェイト「……………」

霊夢「随分前にいなくなった。ヤンデレ・スカーレットじゃないかしら?」

フェイト「話は、聞いていたが有り得るな。」

霊夢「明日…大神に話そうかしら。」

フェイト「いや…俺から話しておこう。」

霊夢もフェイトもブラックの正体に気づきつつあった。

く魔法の森く

ブラック「……………気づいてる…か。そろそろ限界かもしれないな。」

魔理沙「ブラック？どうした？そんな顔して。」

ブラック「うお！魔理沙！いや別になんでもないよ。」

魔理沙「気になるんだぜ。悩みなら聞くんだぜ？」

ブラック「魔理沙…。大丈夫だから…。」

ブラックは、魔理沙に心配は掛けたくない。なぜなら自分の正体を隠すためでもあるし魔理沙の事が好きだから。

魔理沙「本当に大丈夫なのか？」

ブラック「ああ。じゃあ魔理沙、おやすみ。」

魔理沙「あつ…おう、おやすみ。」

ブラック（魔理沙、本を持っていたな、紅魔館に行ってたな。そして微かに少し笑顔が見えた。紅魔館でお話でもしたんだろう。）

徐々にブラックは、紅魔館と紅魔館の住民に嫌気がさしていた。

ブラック「魔理沙…。一緒にいたいよ。」

第10話 魔理沙への思い

ブラック「……魔理沙…魔理沙…魔理沙。」

ブラックは、数分間ずっと呟いている。

ブラック「しかし魔理沙は、私の気持ちに気づいてない。」

口調がヤンデレ・スカーレットになっている。

ブラック「思い切って伝えよう！魔理沙に好きだって！」

ブラックは、決意した。

ブラック「魔理沙…いるか？」

魔理沙「おっブラックか！ん？何か言いたそうな顔してるな？」

ブラック「実は魔理沙、あの…。」

魔理沙「何だぜ？」

ブラック「俺は、魔理沙…の…。」

魔理沙「？」

ブラック「俺、魔理沙の魔法を教えて欲しいんだ！」（何言ってるんだ俺！）

魔理沙「なんだそんな事か。いいぜ。丁度暇だったから私の家で教えてやるぜ。」

ブラック「あ、ああ。ありがとう。」

ブラックは、思いが伝えられない。何故？どうして？魔理沙に好きと言うだけなのに……。

魔理沙「何が知りたいんだ？」

ブラック「ん？ああえーつと。」（ヤバい考えてない。）

魔理沙「もしかして魔法がよく分からないか？」

ブラック「まあ魔法に無縁だったもんで。」

魔理沙「じゃあ移動魔法なんてどうだ？」

ブラック「移動魔法？」

魔理沙「物体を瞬間移動させる魔法だ。こんな感じにつ！」

魔理沙が机に向かって手を向け力を入れるとそこには本が何冊か出てきた。

ブラック「おお。でなんでこの魔法を俺に？」

魔理沙「ブラックは、ナイフを持つてるけどしまう物がないからいつも手に持つてるだろ？それだとあぶないだろ？だから取り出せる感じでこの魔法がいいんじゃないかと思っただ。」

ブラック「そうか。じゃあそれにしてくれ。」

魔理沙「わかったぜ。ちょっと待つてくれ。」

魔理沙は、部屋の奥の方に行った。

ブラック（何故言わない！言えるチャンスは、あまりないんだぞ！「好き」って言う事がなぜ出来ない！）

魔理沙「よし。ブラック。私の手を握ってくれ。」

ブラック「うえ!?!なんで!?!」

魔理沙「そうしないとブラックに魔法が覚えられないんだ。」

ブラック「そうか…じゃあ…」

ブラックは、そつと魔理沙の手を握った。

（魔理沙の手…柔らかい／＼／＼／＼。）

魔理沙「じゃあいくぞ！……はあ！」

ブラック「うお！なんだ!?!」

床に魔法陣が現われ魔理沙の魔力をブラックに分けた。

魔理沙「ふう…完了だぜ！これでブラックは、移動魔法が使えるようになったぜ！試しにやってみてくれ。」

ブラック「ああ。はあ！……おお！手元にナイフが！」

魔理沙「これが魔法の力だぜ！凄いだろ？」

魔理沙は、自慢げに言った。

ブラック「おお。ありがとう、魔理沙！」

魔理沙「さて、じゃあパチュリーに本を返しに行こうかな？」

ブラック「待ってくれ！」

ブラックは、魔理沙の手を掴んだ。

魔理沙「ブラック？」

ブラック「紅魔館に行かないでくれ……」

魔理沙「なんで？」

ブラック「それは……」

ブラックは、紅魔館に恨みを持っている。魔理沙が紅魔館に行ったらもう会えなくなるんじゃないかと思いはじめていた。

魔理沙「……わかつたぜ。今日は、家でゆっくりするぜ。」

魔理沙は、不思議に思いながらも椅子に座り読書をした。

ブラック（魔理沙……すまない。）

ブラックは、魔理沙の家をでた。

く博麗神社く

ブラック「……………」

霊夢「♪」。あら？ブラックじゃない。何か用？」

霊夢は丁度、神社の掃除をしていた。

ブラック「少し話がしたい。」

ブラックと霊夢は博麗神社に入り霊夢に話した。

ブラック「霊夢、真剣な話なんだが…。」

霊夢「うん。何かしら？」

ブラック「実は俺…魔理沙の事が好きなんだ。」

霊夢「ふーん。そうなんだ。」

ブラック「あまり驚かないんだな。」

霊夢「あたりまえよ。魔理沙が好きなのは今までもいたもの。」

ブラック「えっ誰？」

霊夢「プライバシーにかかる事だからあまり言わないけどアリスとパチュリーよ。」

ブラック「アリスってあの人形使いの？」

霊夢「そうよ。まあ同じ魔法使いだから仲がいいのかもね？」

ブラック「霊夢は、自分と魔理沙どれくらい好きなんだ？」

霊夢「普通に好きよ。旧友達だしもしかしたら産まれる前から友達だったんじゃない

かしら？」

ブラック（そこまで…。そっか俺は、今までいなかっただからな。魔理沙とあつて初め

て友達になつてそれですきになつて…)

霊夢「好きと言つても友達関係でね。恋愛対象で見たことはないわ。」

ブラツク「そつか。よかつた話が出来て。」

霊夢「そう？ならよかつたわ。困つた事があれば私にいいなさい。力になれると思うから。」

ブラツク「ああ。ありがとう。」

霊夢「ところでブラツク？」

ブラツク「ん？何？」

霊夢「体ガクガク震えてるけど大丈夫？」

ブラツク「ごめん。霊夢…やっぱり巫女苦手だわ。」

霊夢「…じゃあ克服しましょうか！」

ブラツク「ふえ？」

霊夢「克服よ。さすがに私もこれかも怖がられるのは困るわ。だから私と後…早苗にも来てもらつて私達と生活して克服してみましようか！」

ブラツク「無理無理！絶対無理！」

霊夢「拒否権はないわ。じゃあ早速始めましようか！」